

第11回 SGRA チャイナ・フォーラム

東アジアからみた中国美術史学

■ フォーラムの趣旨

作品の持つ芸術性を編述し、それを取り巻く社会や歴史そして作品の「場」やコンテクストを明らかにすることによって作品の価値づけを行う美術史学は、近代的社会制度の中で歴史学と美学、文化財保存・保護に裏打ちされた学問体系として確立した。とりわけ中国美術史学の成立過程においては、前時代までに形成された古物の造形世界を、日本や欧米において先立って成立した近代的「美術」観とその歴史叙述を継承しながらいかに近代的学問として体系化するか、そして大学と博物館という近代的制度のなかにいかに再編するかというジレンマに直面した。この歴史的転換と密接に連動しながら形成されたのが、中国美術研究をめぐる中国・日本・アメリカの「美術史家」たちと、それぞれの地域に形成された中国美術コレクションである。本フォーラムでは、このような中国美術あるいは中国美術史が内包する時代と地域を越えた文化的多様性を検証することによって、大局的な東アジア広域文化史を理解する一助としたい。

過去3回のチャイナ・フォーラムの論点をあらためて紹介するとともに、これまでの成果を踏まえながら、「東アジアにおける広域文化史」の可能性を探る。日中同時通訳付き。

SGRAとは

SGRA は、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRA は、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRA の基本的な目標です。詳細はホームページ (<http://www.aisf.or.jp/sgra/>) をご覧ください。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からの SGRA 会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRA かわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

東アジアからみた中国美術史学

日時	2017年11月25日（土）午後2時～5時
会場	北京師範大学英東学会堂
主催	渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）
共催	北京師範大学外国語学院、清華東亜文化講座
助成	国際交流基金北京日本文化センター、鹿島美術財団

総司会	孫 建軍（北京大学日本語文化学部）
開会挨拶	今西淳子（渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）代表）
問題提起	林 少陽（東京大学大学院総合文化研究科）

【講演1】 江戸時代の中国絵画コレクションー近代・中国学への懸け橋ー

6

塚本麿充（東京大学東洋文化研究所）

14世紀後半、元朝の崩壊と明朝の成立という中国での大きな社会的変動中に日本に大量に将来された宋元時代の絵画作品は、日本では足利将軍家などによって積極的に購入され、「東山御物」と呼ばれるコレクションが築き上げられることになった。本稿で扱うのは、「東山御物」の崩壊後から20世紀の近代美術史学の成立に至るまでの歴史である。16世紀に起きた足利将軍家の崩壊は、そのコレクションを各地に分散させ、全国の大名家はそれを継承する主体となっていった。1603年の成立以来、約250年の長きにわたって日本を統治した徳川幕府は、全国に300以上あった藩から構成された巨大な政治機構であり、同じ武家政権としての足利将軍家の典礼を積極的に継承し、『君台観左右帳記』に記載されたような中国絵画をふくめた「唐物」を収集し、それを江戸と地方、藩と幕府、各家の間で交換・流通させ、さらには狩野派による広範な模写制作ネットワークが機能することによって、その文化的な権威を保っていった。本稿で扱うのは、足利義満によって分割された牧谿の「瀟湘八景図巻」伝来の歴史であり、これは江戸時代には諸藩に分蔵され、ある時は国元で、ある時は江戸藩邸に保管され、各家を象徴する「文物」となっていったのである。その後、1867年に徳川幕府が崩壊すると、それまでの「唐物」や「漢学」は、「中国美術史」や「中国学」と名前を変え、近代的な学制と博物館制度の中で新しい位置づけを得ていく。その具体的な様相を作品評価の変遷やその言説から考えてみたい。

【講演2】

漢学と中国学のはざまで一長尾雨山と近代日本の中国書画コレクションー

26

呉 孟晋（京都国立博物館）

日本人による中国美術コレクションにとって、20世紀前半の明治・大正・昭和初期は、これまでの「古渡り」と称される将来品を圧倒する、いわゆる「新舶載」の名品がもたらされた転換期であった。その背景には辛亥革命に象徴される中国の政治的変動があったが、飛躍的に増加した人的往来、そしてそれにとまなう中国を対象とする学問体系の変化という要因も見逃せない。江戸時代までの日本における「漢学」は儒学をもとにした、威信財としての書画を収集する理論的支柱であった。一方で明治時代以降の「中国学」は現地滞在をもとに膨大な文献や資料、作品を入手して中国の実像を理解しようとした。中国学者たちは中国書画に関心をもつ新興実業家たちに新知見を示し、収集の指南役をつとめたのである。しかし、実際には漢学から中国学へ、古渡りから新舶載へ単線発展的に置き換わったわけではなかった。本稿で扱いたいのは、近代日本における中国書画収集の学術的背景にみられる「ゆらぎ」である。具体的な事例として、本稿では1903年から14年まで上海に滞在した中国学者で書家の長尾雨山（1864-1942）を話題にしたい。藩士の子に生まれた雨山は中国に渡り、呉昌碩ら当時の文人たちと交流、帰国後は在野の書画鑑定家として活動し、京都大学教授の内藤湖南と好対照をなした。漢学と中国学、そして官と民の「はざま」に生きた長尾雨山の活動をとらえて、近代日本の学知および中国との文化交流の一端を明らかにしてみたい。

総合討論

45

進行：王 志松（北京師範大学）

討論：趙 京華（北京第二外国语学院文学院）

王 中忱（清華大学中国文学科）

劉 曉峰（清華大学歴史学科）

総括：董 炳月（中国社会科学院文学研究所）

同時通訳（日本語⇄中国語）：丁 莉（北京大学）、宋 剛（北京外国語大学）

講師略歴 53

あとがき：第11回チャイナ・フォーラム報告：塚本磨充 54

アンケート集計結果 58



開会挨拶：今西淳子 SGRA 代表



総会司会：孫建軍氏



問題提起：林少陽氏



会場風景

第11届SGRA中国论坛

第11回SGRAチャイナフォーラム

东亚视域下的中国美术史学

東アジアからみた中国美術史学

時間：2017年11月25日（周六）下午2点~5点

地点：北京师范大学 后主楼914

学术报告

大会主持：孙建军（北京大学日本语言文化系）

问题提起：林少阳（东京大学大学院综合文化研究科）

报告一：近代中国学的桥梁——江戸时代的中国绘画收藏

报告人：塚本磨光（东京大学东洋文化研究所）

报告二：汉学与中国学之间——长尾雨山与日本近代的中国书画收藏

报告人：吴孟晋（京都国立博物馆）

圆桌会议：

主持：王志松（北京师范大学外国语言文学学院）

讨论：赵京华（北京第二外国语学院文学院）

王中忱（清华大学中文系）

刘晓峰（清华大学历史系）

总结：董炳月（中国社会科学院文学研究所）

主办：渥美国际交流财团关口全球研究会（SGRA）

协办：北京师范大学外国语言文学学院

清华东亚文化讲座

赞助：国际交流基金北京文化中心、鹿岛美术财团

ポスターデザイン：顔淑蘭氏

講演 1



江戸時代の 中国絵画コレクション —近代・中国学への懸け橋—

塚本 啓充

東京大学 東洋文化研究所

はじめに一応仁の乱と散在する唐物—

本稿の扱う範囲は、室町幕府の崩壊の契機となった応仁の乱（1467-1477）から、江戸幕府の成立（1603年）をへて、近代中国絵画コレクションの端緒となる内藤湖南らの北京訪問（1910年）に至るまでの約五百年間におよぶ、「中国絵画」の歴史であり、本稿の目的はその概括的な理解を示すことにある。

日本所蔵の中国絵画は奈良・平安時代から陸続ともたらされ、鎌倉時代には多くの「唐絵」がもたらされたことが知られる。しかしそのような鎌倉時代にもたらされた「唐物」の実態については明らかでないことが多く、今後の研究課題となっている。ただ、北条時宗が開山した鎌倉円覚寺の塔頭である仏日庵の財産目録である『佛日庵公物目録』（図1、元応2年（1320）の目録。住持法清によって貞治2年（1363）書写）には、禅宗の頂相、墨跡、法衣や陶磁器などにまじって、「猿二鋪 牧谿」「坐禅猿一鋪 牧谿」「龍虎二鋪 徽宗皇帝」「蘭二鋪 趙幹」などの品名が記されていることが知られる。おそらく日本に現存する最も初期の「唐物」目録であるこの記録からは、日本社会において最も初期にその名前と作品が知られた人物は、徽宗皇帝や牧谿であり¹、すでに趙孟頫や高克恭が活躍していた同時代の中国画壇からはむしろ正系には属さない人々であったことが分かる。

その後、鎌倉幕府が滅亡し（1333年）、南北朝の動乱を経て、京都に足利幕府が成立する（1336年）と、三代将軍となった足利義満（在職1368-1394）は、のちにいわゆる「東山御物」と呼ばれる宋元画の一大コレクションを築いていくこととなった。それは足利義満のものと考えられる「天山」印や、足利義教（在職

1 荏開津通彦「牧溪の尊重」『アジア遊学』142、古代中世日本の内なる「禅」、170-182頁、2011年。

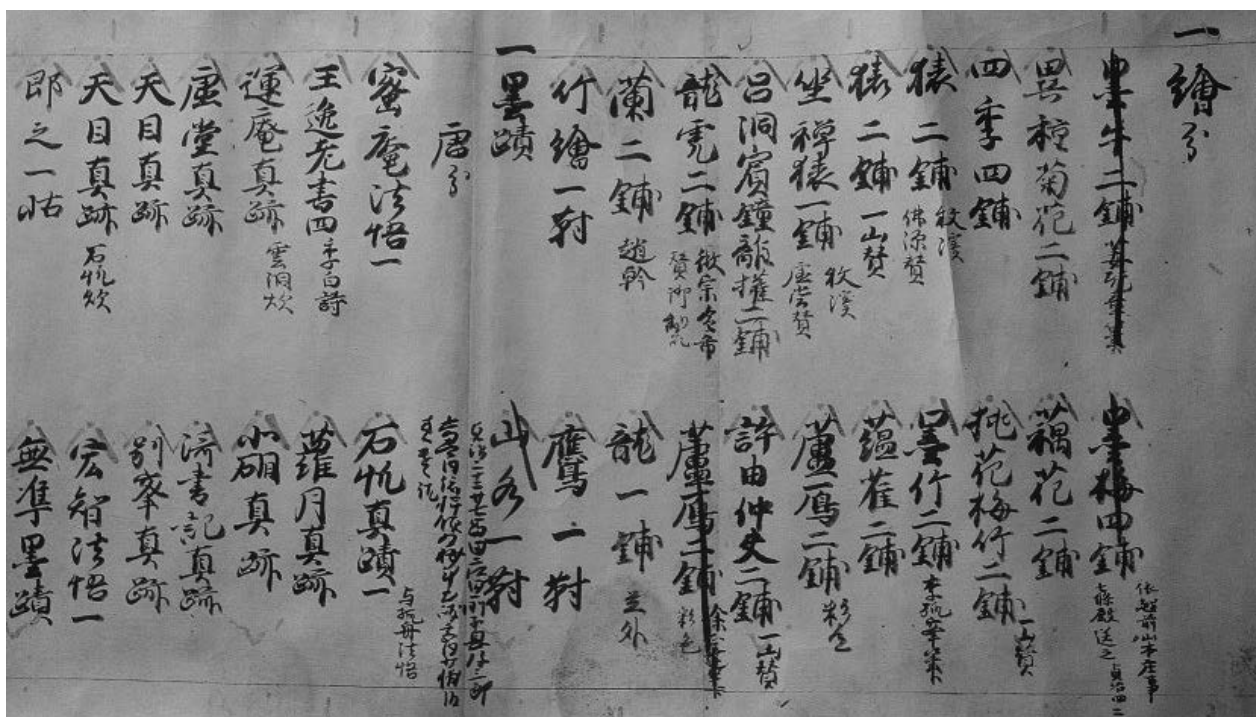


図1 『佛日庵公物目録』(元応2年(1320)の目録。貞治2年(1363)書写)

1428-1441) のものとされる「雑華室印」のある作品の存在によって、そのコレクションの有り様を具体的に知ることができる²。この時期、中国では元が北走して明が成立し(1368年)、その元と密接な関係を保っていた高麗はその後すぐに滅亡して朝鮮王朝が成立した(1392年)。足利義満の治世はまさにこの東アジアの巨大な動乱期にあたっており、東山御物とは、中国での書画創作の理念が宋から元へと成熟し、展開していくその時期にのみ集めることのできた特殊なコレクションであったと言えるだろう。むしろこの時期、足利將軍家に集められた牧谿や梁楷といった南宋禅林や宮廷絵画は、鎌倉時代の価値観を継承しつつも、それが具体的に日本の鑑賞者の前に姿を現した、いわば復古的な意味を持っていたと言えよう。

しかし本稿の問題の中心となるのは、足利將軍家コレクションのさらにその後である。足利將軍家は応仁の乱(1467-1477)によってその権威を大いに低下させることとなるが、しかしながら応仁の乱は、日本にもたらされた中国文物の、新たな生命の歴史の幕開けでもあったのである。

「其の比、茶の湯せざるも人非人と等し。諸大名は云うに及ばず、下々、殊に南都・京・堺町人に至る迄、茶の湯専一とす。其中上手並びに名物所持之者、京・堺の町人等も、大和大名に等しく御下知を下され、御茶の湯の座に召し出され、御雑談の人数に召し加えられ、これに依って、町人等猶お御名物を所持す。京・堺に珠光の弟子多し。大抵聞き及ぶ衆、松本・篠・道堤・善法・

2 板倉聖哲「東山御物の美—中国絵画を中心として」『東山御物の美—足利將軍家の至宝』三井記念美術館、2014年。また同編『日本美術全集第6巻 東アジアの中の日本美術』小学館、2015年、を参照。

古市播州・西福院・引拙。

扱、東山殿薨去の後も、代々の公方様は御茶の湯あり。同朋衆芸阿弥・相阿弥、先師学ぶ。其の後（東山）御物天下に散在し、今于絶えずして、茶の湯の道繁盛也。珠光の跡目、宗珠・宗悟・善好・藤田・宗宅・紹滴・紹鷗也。」

『山上宗二記』³

この箇所は堺の茶人であった山上宗二（1544-1590）による茶道の口伝書である『山上宗二記』の冒頭で、山上宗二自身がその文化史の発展史観を披歴した部分である。ここでは「東山殿」すなわち足利義政薨去の後も、歴代の将軍は茶の湯をたしなみ、近年は南都、京、堺の町人に至るまで、多くの人がそれを学んでいる。その結果、「（東山）御物天下に散在し」と言うのである。今までは京都の将軍家に集約されていた中国文物は、応仁の乱という戦乱と、茶の湯の大流行によって天下に散在することとなった。実はこのことが、日本における中国文物の地方への分散と新たな権威化を生むこととなるのである。本稿では特に、牧谿に問題を絞りながら、関連する課題について考えていきたい。

第一章 君臨する唐絵 —松平忠直と「牧谿」、「初花」のその後—

足利将軍家、および日本の唐物を代表する存在として、牧谿を挙げることに躊躇する人はいないであろう。牧谿「観音猿鶴図」（南宋、大徳寺）は、足利将軍家のコレクション目録である「御物御画目録」（東京国立博物館）に「大 観音 脇 猿鶴 牧谿」として著録され、同じく「四幅 山水 徽宗皇帝」として著録される「夏秋冬山水図」（金地院、久遠寺）や、「出山釈迦 脇 山水 梁楷」として著録される「出山釈迦・雪景山水」3幅（東京国立博物館）と並ぶ、現存する足利将軍家コレクションの最高峰といってもよいだろう。それぞれが「天山」「道有」印を持ち、足利義満の時代に遡るコレクションであることが確認できる。

一方で牧谿「観音猿鶴図」は、いつのころからか足利将軍家から流出し、禅僧であった太原崇孚（1496-1555）が所有、その示寂にあたって大徳寺に寄進された。「夏秋冬山水図」（金地院、久遠寺）も同様に十代将軍足利義植より周防（山口県）の大内政弘（1446-1495）に贈られ、その後大内義隆（1507-1551）が妙智院の策彦周良（1501-1579）に与え、さらに三章令彰（?-1615）から以心崇伝（1569-1633）に与えられ、南禅寺の塔頭である金地院に伝えられることとなり、夏幅は寛文13年（1673）、遠江（静岡）浜松城主の太田資宗から甲斐の身延山久遠寺に寄進されている。一方、「出山釈迦・雪景山水」3幅（東京国立博物館）は、足利将軍家から流出したのちの経路は明らかではないが、17世紀初めころには若狭酒井家をはじめ諸家に分蔵されていった。まさに山上宗二が述べたように、足利将軍家の中国絵画コレクションが「（東山）御物天下に散在」して

3 「山上宗二記」『日本の茶書』東洋文庫、142-143頁。



図3 牧谿「平沙落雁図」(南宋、出光美術館) 越前(津山)・松平家伝来

前田家伝来)

- (4) 漁村夕照 (大幅) 根津美術館 (徳川家康、紀州徳川家、伊予・松平家伝来)
- (5) 平沙落雁 (大幅) 出光美術館 (上杉家、徳川秀忠、松平忠直、津山・松平家伝来)
- (6) 江天暮雪 (小幅?) 相国寺 (徳川家康〔駿府御分物〕、紀州徳川家伝来)
- (7) 洞庭秋月 (小幅) 徳川美術館 (古河・土井家、徳川将軍家、尾張・徳川家伝来)
- (8) 瀟湘夜雨 (小幅) 個人 (川越・秋元家伝来)

この作品はもとは画卷であったと考えられ、小川裕充氏の復元案によれば、上・下二巻の画卷に詩の入った形式であったことが明らかにされている⁴。これはもと足利将軍家のコレクションであり、『御物御画目録』に著録される「紙横八景 牧谿」に相当すると考えられており、『室町殿行幸御節紀』では「御十二間」の東西壁に4幅ずつ掛け並べたとされているため、現存のように大幅の4幅には「道有」印が押され、この時点ではすでに8幅に裁断されたと考えられている。しかしこの8幅もいずれかの時点で足利将軍家を離れ、17世紀初頭には各地の大名家が次第に所有するようになっていった。今回はそのうち非常に興味深い伝来が語られている「平沙落雁図」(図3、出光美術館)について考えてみたい。

牧谿「平沙落雁図」は、『子爵松平家御蔵品入札目録』(大正14年〔1925〕6月11日、東京美術倶楽部)において売立が行われており、江戸時代を通じて美作国を治めた津山・松平家(現在、岡山県津山市)に伝来していた。津山松平家は松平忠直(1595-1650)の長男であった光長(1616-1707)を祖として再興された家で、そこに牧谿「平沙落雁図」が伝来したのには非常に深い意味があった。

大坂夏の陣がおこり、豊臣秀頼をはじめとする豊臣方が大坂城に立て籠ると、徳川家康、秀忠の軍勢は大坂城を取り囲み、これを落城させた。ここで一番槍の手柄をたてたのが、75万石を相続していた若き福井藩主・松平忠直である。松平忠直の父である結城秀康は、徳川家康の次男であったが、長男である信康は自刃を迫られ、次男であった秀康は豊臣秀吉に養子として出され、のちに結城氏を

4 小川裕充「牧谿筆瀟湘八景図巻の原状について」『美術史論叢』13、1997年。

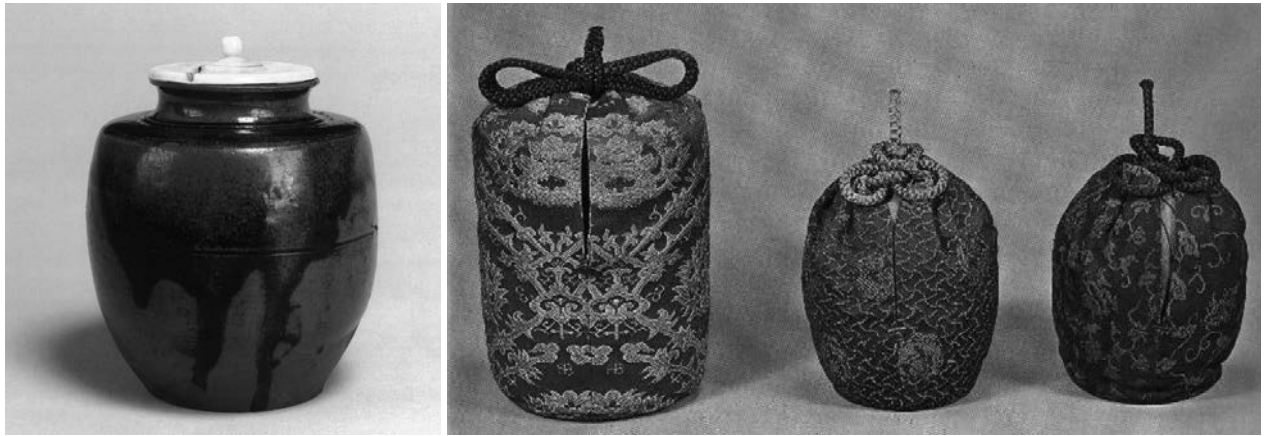


図4 「唐物肩衝茶入 銘初花」(南宋～元、徳川記念財団) 越前(津山)・松平家伝来

継いだため、三男である秀忠が、その母親が三河国の名家出身であることもあり、徳川家康のあとを継ぎ二代将軍となっていた。忠直の父である結城秀康はこのような家庭の複雑な事情もあり、特に福井藩68万石を与えられ優遇されており、その子であった忠直は父の弟(叔父)にあたる徳川秀忠に仕え、大坂夏の陣に出陣したのである。この時大坂城に一番乗りした越前勢約1万5千人は、徳川勢で最も多い「三七五三」の首級を挙げたほか、家臣の西尾仁左衛門が真田幸村の首を上げるという大功をおさめることとなる。その後、京都二条城で秀忠に謁見した忠直が恩賞として得たのが、牧谿「平沙落雁図」(図3、現・出光美術館)と「初花茶入」(図4、現・徳川記念財団)であったのである。福井藩に伝わる郷土資料である『片簞記』(福井市立郷土歴史博物館)には、以下のような記述がある。

「(慶長20年〔1615〕)同五月七日 大阪落城 同十日 京都 忠直公 初花茶入れを賜ふ。秀忠公より「落雁」御掛物 御拝領。」

「片簞記」巻二、忠直公⁵

松平忠直は大坂夏の陣の大功により、知行が大幅な増分がなされるのを望んでいたが、豊臣家を滅亡させても徳川方の譜代大名たちに配分すべき新たな知行の獲得はなく、「唐物」という現物支給でのねぎらいとなったのである。福井藩の記録による5000人もの将兵の犠牲者を出していた忠直はこの時、屋敷に帰って家臣たちに報いることのできる十分な知行が得られなかったことを怒り、屋敷の玄関で「初花の茶入」を蹴って割ってしまったと言われている⁶。ここで非常に興味深いのは、これらの祖先の武功や唐物まつわる物語を、子孫たちがいかに継承していったのか、ということにある。ここからは、江戸時代における「唐物」の社会的な意味が見えてくるだろう。

よく知られたように忠直はその後、いわゆる御乱行に走るることとなる。元和7年(1621)、27歳になった忠直は病を理由に江戸への参勤交代を拒否、翌年には

5 『片簞記』巻二、忠直公。現在、福井市立郷土歴史博物館ホームページにおいて全頁を閲覧することができる。

6 『国事叢記』一、第一三五、一三六開(松平文庫)。福井藩の歴史をまとめた極めて重要な歴史書である『国事叢記』の原本は松平文庫に保存されているが、現在、福井県文書館に保管されており、ホームページ上で全文を閲覧することができるほか、『国事叢記(上下)』福井県郷土誌懇談会、1961年、1962年、として全文翻刻されている。

将軍・徳川秀忠から隠居を命じられ、出家して一伯と名乗り、竹中重義の豊後府内藩へ移されて謹慎し、そこで一生を終えることとなった。一方福井藩は、その後忠直の弟で、越後高田藩主であった忠昌（1598-1645）を迎えて福井藩主とし、忠直と将軍秀忠の娘勝姫の長男であった光長は交替に越後高田藩に転封ということとなった（図2、参照）。その結果、福井藩は忠直ではなく、その弟であった忠昌の家系が藩主を引き継いでいくこととなる。一方で越後高田藩に移された光長は越後騒動（1679年）を経て改易され、あらたに結城秀康の五男・松平直基の孫であった松平宣富を養子とすると、元禄11年（1698）、美作国に津山藩10万石を与えられ、ここによりやくお家の再興を果たすことができたのである。ではこの複雑な、福井藩と津山藩の家名をめぐる攻防のなかで、忠直の拝領した「平沙落雁図」「初花茶入」はどのような運命をたどることとなり、それはどのような物語とともに伝承されることとなったのであろうか。

すでに最初に見たように、幕末に至るまでの間、「平沙落雁図」「初花茶入」は福井藩ではなく、津山藩へと伝来することとなった。その理由は「平沙落雁図」「初花茶入」が福井藩という土地に属する性質のものではなく、忠直が拝領したもの、すなわち忠直自身の家系に属するものと考えられたからであろう。よく知られた通り、松平忠直は岩佐又兵衛を福井に招き、いわゆる「又兵衛絵巻群」と呼ばれる華麗な絵巻群を制作させているが、それも忠直の改易とともに福井藩ではなく越後高田藩にいた子の光長へと継承され、のちに再興された津山藩へと受け継がれている⁷。これら忠直に属する宝物としての性格から、「平沙落雁図」は津山藩へと継承されたと考えられ、大正14年（1925）の売立まで津山・松平家に伝世した。もう一方の家宝である「初花茶入」は、元禄11年（1689）に光長の養嗣子・長矩が津山藩主としてお家の再興が叶った際、同年12月にそのお礼として徳川将軍家に献上された⁸。この作品こそは、現在徳川記念財団が所有する「初花茶入」（図4）そのものであり、織田信長から徳川家康へ、松平忠直からさらに徳川家に再献上された、伝世の肩衝茶入れのなかでも伝説的な作品として、今に至るまで非常に高い名声を誇っている。

それではその、藩の領国支配権を象徴するような宝物である「平沙落雁図」「初花茶入」を津山藩に譲った福井藩では、その空白をどのように埋めていったのであろうか。福井藩ではその後、第四代藩主・松平光通の自刃、第六代綱昌の隠居といった不祥事が続き、貞享3年（1686）にはいわゆる「貞享の半知」により、48万石の知行が没収され、前・第五代藩主であった昌親の名を吉品と改めて再封することで事態を収拾し、かつ知行も25万石に半減されるという大事件が起こった。その後、福井藩は江戸時代初期における75万石の大藩としての面目を徐々に失っていくこととなる⁹。

7 この伝来の過程については、筒井忠仁「又兵衛絵巻の伝来と享受」『岩佐又兵衛展』図録、福井県立美術館、2016年、197-201頁。また、『越前家代々御道具帖』も参照のこと。

8 「初花肩衝」は、松平忠直改易後は長子の松平光長が相続したが、光長が越後騒動で改易されると、姪の女二の宮（光長妹・亀姫次女）が一時預かり、光長放免後は再び光長に戻され、元禄11年（1689）に幕府に献上された。この経緯については、浅倉有子「『初花肩衝』のゆくえ」『日本歴史』810、2015年、67-76頁。

9 吉川喜代江「貞享の半知における家臣団―福井藩政史研究ノート」『福井県文書館研究紀要』3、2006年、75-82頁。

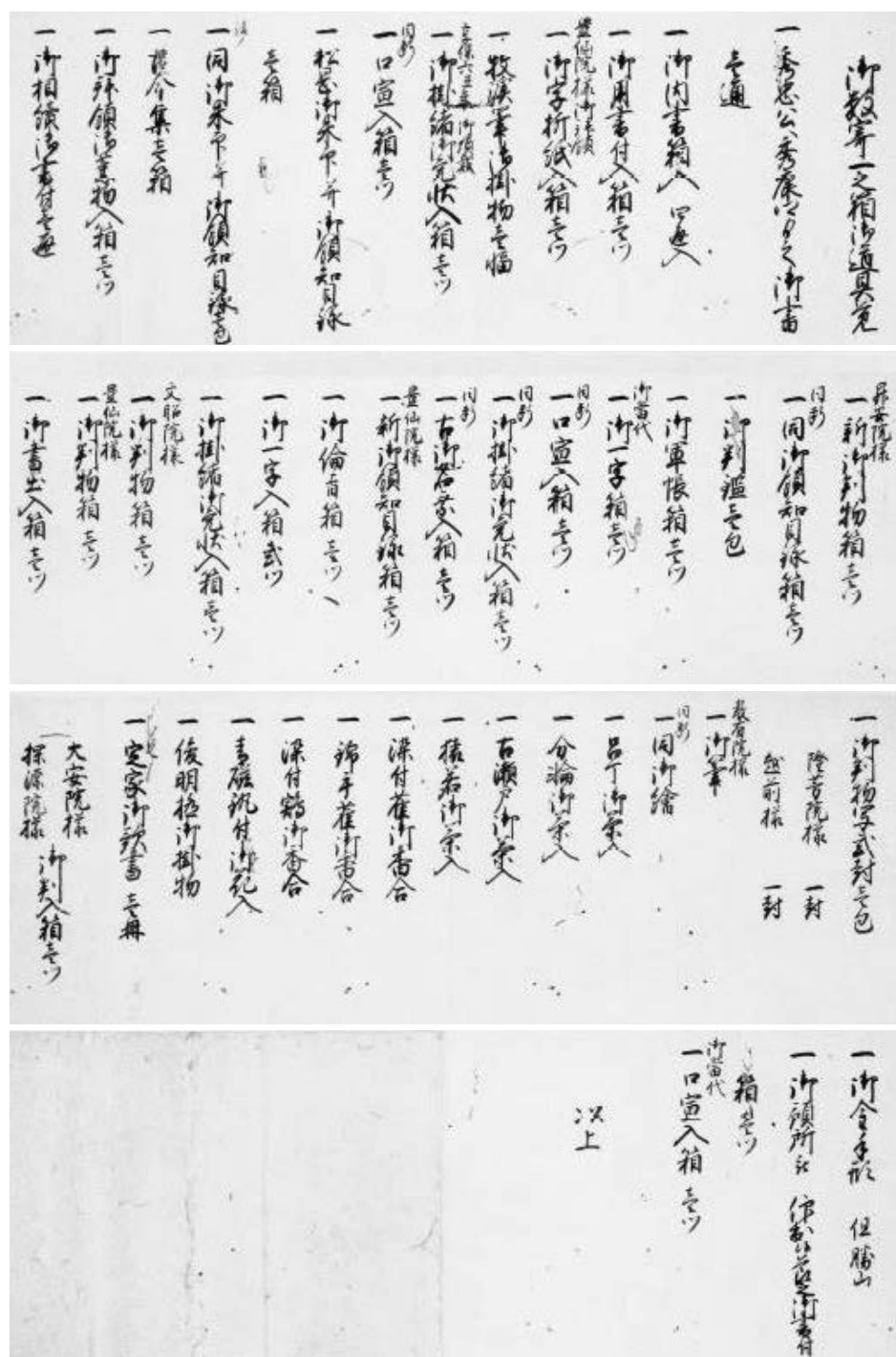


図5 「御数奇一之箱御道具覚」(松平文庫〔福井県立図書館保管〕)



図6 「青磁浮牡丹文不遊環耳付花入」(南宋、三井記念美術館)

そののち、福井藩第十代藩主であった松平宗矩（1715-1749）頃の成立と考えられる「御数奇一之箱御道具覚」（図5、松平文庫〔福井県立図書館保管〕¹⁰）には、非常に興味深い記述がある。この目録は国元（福井）に置く「御数奇一之箱」に保管することが決められていた特に重要な宝物の目録であるとされる¹¹。これは第四代将軍・徳川家綱（厳有院、1651-1680）、第六代将軍・徳川家宣（文昭院、1662-1712）をはじめ、福井藩の松平光通（第四代、大安院、1636-1674）、松平吉品（第五代・七代、探源院、1640-1711）、松平吉邦（第八代、昇安院、1681-1722）、松平宗昌（第九代、豊仙院、1715-1749）らの旧所持品が記録され、さらにその次の世代の所持品が特に「御当代」として記録されていることから、十代・松平宗矩（1715-1749）頃の福井藩・松平家の最重要宝物目録と考えることができる。非常に興味深いのは、そこに様々な中国文物が登場することである。

まず「御数奇一之箱御道具覚」で第一に挙げられているのは徳川家初代と二代であった「秀忠公、家康公」の「御書」であった。これはいわゆる、藩の草創期にかかる最も重要な公文書であり、そのうち何通かは越葵文庫（福井市郷土歴史博物館寄託）に今も保管されている。それを見ると、秀忠が結城秀康に「越前国御拝領」を喜ぶ書簡や¹²、歴代将軍からの領土安堵の朱印状などといった公文書が集められているのがわかる。非常に興味深いのは、そこに並んで上から4つ目に「牧谿筆御掛物壺幅」が記されていることである。すぐ隣の5つ目にある「享保六 丑 御頂戴 御掛緒御免状入箱壺ツ」とは、享保6年（1721）に、支藩松岡藩の再併合により30万石に復したことを証する文書であると考えられるので、ここからみても「牧谿画」が、越前・松平家にとって領土の安堵を約束する公文書と同じような価値を以て、わざわざ国元に厳重に保管されていたことがわかる。

江戸時代において全国の大名家のコレクションは、その居城であった国元と江戸におかれた江戸屋敷の両方に二分して所蔵されていた。国元に置かれた文物

10 松平文庫〔A0143-20581〕、福井県文書館保管。

11 久角健二「解説」『再会 ふくいゆかりの名宝たち』福井県立歴史博物館、2015年、123頁。

12 『越前松平家展 文書の部』福井市立郷土歴史博物館、1979年、3頁。なおこの文書には松平春嶽の手で「越前家第一之珍宝」との箱書があり、徳川秀忠より結城秀康に宛てられた越前の領有を確定する書状が福井藩にとって最も重要な文書であったことを示している。



図7 「茶壺 銘 初花」(越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館) および松平春嶽書付

と、江戸屋敷に置かれた文物の性質の違いは必ずしも明らかではないが、おそらくは国元に保管された文物は家や領国に関する最も重要なもの、江戸屋敷に置かれていたものは、後述するように将軍家や大名家間での贈答用の文物であると、ひとまずは仮定することができるだろう。その意味で同じく福井藩に伝来した「青磁浮牡丹文不遊環耳付花入」(図6、南宋、三井記念美術館)は特筆に値する。

この作品は付属する箱書によって、もとは福井藩の「御国御数寄一之箱」に納められていたもので、先述の「御数奇一之箱御道具覚」(松平文庫〔福井県立図書館保管〕)にある「一 青磁鉢付御花入」にあたると考えられている¹³。箱書によれば、延享3年(1746)九代将軍・徳川家重の将軍宣下のご祝儀に老中を招いた際に、御休息所で用いるために江戸屋敷に輸送したもので、さらに「尤御大切之御道具二候間、上箱申付、一之箱御道具之由書付仕差置候様二被 仰付 上箱申付差置。延享三 丙寅四月」(最も大切な道具であるから、上等な箱を作るようにと命じられ、さらに(国元の)「一之箱」のお道具であることを書きつけておくようにと命じられ、箱をつくった)とされている。これを命じたのは、おそらく当時の藩主であった松平宗矩であろう。そしてこの「青磁浮牡丹文不遊環耳付花入」がかくも重要視されたのは、決してその形の美しさや釉薬の美しさにのみよっていたのではない。これがかの、大坂城の伝来品という由緒を持っていたためであり、越前・松平家が、その領国を統治する正統性を示す最も重要な文物であったからである。松平宗矩はおそらく老中たちの前にこの青磁花入を披露し、先祖の武勲を誇らしく語ったに違いない。

さらに興味深いのは、越前・松平家では、本来は津山・松平家から徳川将軍家に献上されたはずの「初花茶入」すなわち「初花肩衝」とは別の茶壺が、この「初花」の伝来を語るものとして江戸時代末には登場していたことである。「初花茶壺」(図7、越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館)がそれで、ここには幕末福井藩の最後の第十六代藩主となった松平春嶽(1828-1890)の書付が次のようにつたえている。

「大坂夏御陣御戦功二付キ、従東照宮御手自西厳院<忠直卿ナリ>御拝領之

13 『三井家伝世の至宝』三井記念美術館、2015年。

處、群臣ノ功劳二賞与スベキモノ無之とて、此御壺ヲ御玄関ノ前へ御抛却相成、後修補して当家第一の重宝トナルナリ。明治六年 十五代孫 正二位 松平春嶽（花押）」¹⁴

この茶壺は、現在の研究から見れば中国製ではなく、おそらく瀬戸で焼かれた16世紀頃の作品であろうと考えられている¹⁵。しかしここで重要なのは、越前・松平家にこの草創期の伝承を語る聖遺物たる「初花茶壺」が存在していたことで、これは当時の唐物をめぐる大変に重要な事項を物語っていると言えるだろう。

すなわち、日本社会にとって「唐物」とは、由緒づけられた物質であることが大切なのであり、なによりもその物質が背負った物語が重要なのである。江戸時代を通じて越前・松平家と津山・松平家はその家格の上下をめぐって争う関係にあった。牧谿「平沙落雁図」、「初花茶入」、または豊臣秀吉から徳川家康・秀忠、松平忠直に贈られた名刀「童子切」（平安時代、現在は東京国立博物館蔵）などを相続し、忠直以来の文物の豊富さで優る津山・松平家は、室町時代以来の足利將軍家コレクションの最後の再配分に預かり得た家ということができる。一方で、忠直の弟の家系になってしまった福井藩は、津山10万石に対して30万石と石高では優っていたものの、その歴史を語る文物に欠いていた。一族の「歴史」、自分たちが領国を支配するに至った正統な「物語」を語るためにも、「忠直」と「大坂夏の陣」に関係する視覚的な物証は、家名の存続とその意味を伝承するために必要不可欠な「モノ」であったのである。おそらく江戸時代後期の段階で、割れた茶壺を見出し、それに「初花」の記憶を手繰り寄せ、「当家第一の重宝」としたのはこのような理由によるのであり、日本社会における「唐物」が背負っていた重要な社会的機能の一端を示してくれるものと言えよう。

第二章 流通する唐絵 —徳川將軍家と大名コレクションの相互循環—

先述したように大名家のコレクションは、国元の居城と江戸屋敷に二分されて所蔵されていた。江戸屋敷に置かれた中国絵画（唐絵）は大名家や將軍家との贈答に使われたらしく、国元に納められていたような、「家」を象徴すると考えられていたような文物とは、その様相を異にしていたと考えられよう。ここでは『徳川実記』をもとにいくつかの例を挙げながら、その様相を窺ってみたい。

玉潤は南宋末期に活躍したと考えられる僧で、金華（浙江省）の人。その作品は大部分が日本に伝来し、牧谿とともに日本人に最も大きな影響を与えた画家であるということができる¹⁶。玉潤「廬山図」（図8、南宋、岡山県立美術館）はその代表作の一つで、佐久間将監（1570-1642）が入手した後、茶掛けにする

14 『春嶽公記念文庫名品図録』春嶽公記念文庫名品図録刊行会、1983年、342頁。

15 『茶壺』徳川美術館・根津美術館、1981年、187頁。

16 なお、玉潤作品の中国での伝来状況については、衣若芬「玉潤「瀟湘八景圖」東渡日本之前—「三教弟子」印考」『台灣大學美術史研究集刊』24、2008年、147-174頁。



図8 玉澗「廬山図」(南宋、岡山県立美術館)

ために狩野探幽と相談して切断、3幅としたものの1幅である。江戸時代初期には若狭小浜藩藩主となった酒井忠勝（1587-1662）が所有していたが、万治3年（1660）4月27日に四代将軍・徳川家綱に献上されることとなったという。『徳川実記』にはその献上の様子をめぐる次のような記録がある。

（万治三年四月二十七日条）「酒井忠勝入道空印日光山より帰謁し。宋僧玉澗自画賛廬山瀑布の画幅。若狭盆一。金馬代、太刀を献ず、御手づからのしを給ふ。」¹⁷

何故この時、酒井家の豊富なコレクションの中から玉澗「廬山瀑布図」が献上に選ばれたのか、その理由は明らかではない。しかし酒井忠勝はかつて日光造営の総監をつとめ、この時には家督を子の忠直に譲って隠居していたため、その生涯の謝礼と、子孫への手厚い庇護の願い、という意味での献上であったのだろう。というのも、全国の大名家は、その致仕または代替わり、藩主の死去などに際して、多くの中国絵画をはじめとする美術作品を将軍家に献上していたからである。

（天和二年三月二十一日）「松平元千代襲封を謝して。吉包の刀、銀千枚、時服五十。若君に介則の太刀、時服。銀そへて奉る。其父大膳大夫綱広致仕の得物とて、正宗の刀、茶壺（有明）。若君に來国光の刀。牧谿筆鶏挂幅。御台所に公卿集写の源氏物語をささぐ。立花和泉守種長致仕によて。陳所翁筆龍対幅。若君に牧谿筆蘆雁挂幅。」¹⁸

これは天和2年（1682）、松平元千代すなわち毛利吉就（長州藩第三代、1668-1694）が隠居した父・毛利綱広（1639-1689）の跡を継いだ折に、五代将

17 『徳川実記』第四編、万治三年四月二十七日条（国史大系本。以下同じ）。

18 『徳川実記』第五編、天和二年三月二十一日条。

軍・徳川綱吉に献上した物品の記録である。父・毛利綱広より「牧谿筆鶏挂幅」が将軍に献上され、御台所には「公卿集写の源氏物語」が献上されている。また同時に、筑後三池藩第二代・立花種長（1625-1711）が長男・種明に家督を譲った謝礼に「陳所翁筆龍対幅」が、「若君」すなわち徳川綱吉の子で夭逝した徳松（1679-1683）に「牧谿筆蘆雁挂幅」が贈られている。同様の傾向は、この時期のほかの大名でも見ることができる。

（天和二年三月二十一日）「致仕松平新太郎光政。この五月二十二日うせにければ、遺物黙庵の画、印月江賛布袋の挂幅を。其子伊予守綱政より献ず。御台所へは小倉大納言実名卿、頓阿法師両筆の古今集。若君には趙子昂が画。馬の挂幅なり。松平別峯入道康信の遺物信国の刀を、其子豊前守信庸より献ず。御台所へ二条大納言為定卿筆の歌書。若君には相州広光の刀。姫君には張昶端の画卷なり。」¹⁹

ここでは今度は、岡山藩初代となった池田光政（1609-1682）の逝去にあたり、その子である池田綱政（1638-1714）から、「遺物」（もしくは「遺留」）として、「黙庵の画」と月江正印賛の「布袋の挂幅」が将軍に献上、そして御台所には「小倉大納言実名卿、頓阿法師両筆の古今集」が、若君には「趙子昂が画。馬の挂幅」が献上されている。ここでも毛利家の場合と同じく、男性には刀や中国絵画が、女性には仮名や物語が献上され、しかも子供には馬の画という取り合わせも面白い。また、佐倉藩第二代であった松平康信（1600-1682）の逝去にあたり、子の松平信庸（1666-1717）より献上があり、姫君にむけて「張昶端の画卷」が献上されている。この画卷もおそらく蘇州片のような彩色の鮮やかな物語風の画卷であり、それゆえに綱吉に数人いた「姫君」へ献上するということになったのかもしれない。このような、藩主の致仕や逝去による中国絵画の献上は、ひとり大名家に限ったことではなく、本願寺や次の宇治・万福寺の記事にもみられる。

（延宝元年四月二十六日）「黄檗山より使僧もて。先住隠元遺物とて。謝恩の偈。元王振鵬筆五百羅漢の一軸を献ず。」²⁰

これは延宝元年（1673）、この年の4月に示寂した隠元隆琦（1592-1673）の「遺物」として「王振鵬筆五百羅漢の一軸」が、将軍・徳川家綱に献上された記事である。牧谿や梁楷と言った定番の中国絵画ではなく、王振鵬の作品が贈答に使われるのは非常に珍しく、やはり隠元隆琦の実際の遺留品であった可能性も高いだろう。

ではこれらの作品は将軍家のなかでどのように使用されたのであろうか。例えば、郭熙「牡丹図」という著名な作品がある（図9）。中国の中国絵画史では絶対に存在しない、北宋の山水画家である郭熙によるこの作品は、日本における中世から近世を通じて非常に著名な作品であった。この作品は、享保5年（1720）6月6日に、八代将軍・徳川吉宗に献上された。

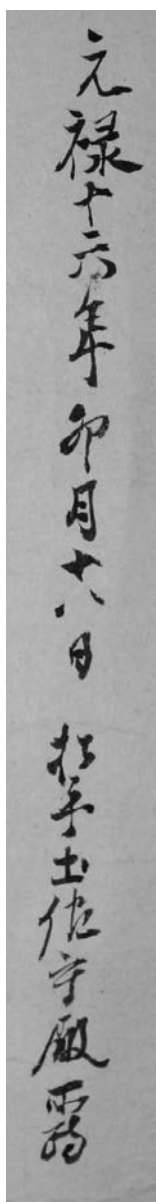
（享保五年六月六日）「松平大助豊常家つぎしを謝して、国宗の太刀、銀五百枚、綿三百把をささげ、父の土佐守豊隆が遺物とて、来国次の小指添、郭熙が

19 『徳川実記』第五編、天和二年三月二十一日条。

20 『徳川実記』第五編、延宝元年四月二十六日条。



図9 郭熙「牡丹図」模写（江戸時代、東京国立博物館）



画の牡丹に、山谷が讃せし掛幅を奉る。」²¹

この作品は足利義政の旧蔵品で土佐山内家の重宝となったものであった。東京国立博物館に所蔵される（伝）狩野常信「唐画卷」には本図の模写が納められており、そこには「元禄十六年卯月十六日 松平土佐守殿所持」との書付があることから（図9）、郭熙「牡丹図」は元禄16年（1703）にはまだ土佐・山内家にあったことがわかる。非常に興味深いのは、本図を献上した山内豊常（1711-1725）は当時まだ数え10歳にも満たない子供であり、前年の享保4年（1719）4月28日、将軍・徳川吉宗にお目見がかなったばかりであったことである。父である山内豊隆は享保5年4月14日に逝去、豊常が家督を継ぐことを許されたのが同年5月27日、郭熙「牡丹図」が献上されたのが同年6月6日であるから、郭熙「牡丹図」は山内家の家督相続の危機に際して、徳川将軍家と山内家をつなぐ重要な役割を果たしたもののと言えよう。

このようにして将軍家に集まった様々な文物は、「柳営御物」と呼ばれるが、それは決して将軍家に長くとどまる性質のものでもなかった。将軍は様々な大名屋敷に御成りをなしているが、その際には、大名家から様々な文物が献上されたり、逆に将軍家方の下賜があったりした。現在、牧谿「柳燕図」（図10、南宋、徳川美術館）は、元禄11年（1698）3月18日に、五代将軍・綱吉が、尾張徳川家二代・徳川光友の麴町邸に御成りがあった際に拝領したもので、その後長く尾張徳川家に



図10 牧谿「柳燕図」（南宋、徳川美術館）

21 『徳川実記』第五編、享保五年六月六日条。

伝来したものである²²。一方『徳川実記』には、次のような興味深い記事も見つかる。

（元禄十年四月十一日）「紀伊大納言光貞卿の邸に臨駕あり、（中略）この日の賜物は亜相に青江重次の御太刀、（中略）また内々より光貞卿へ茶入（薬師院）、綱教卿へ梁楷福祿寿の画幅。（後略）」²³

元禄10年（1697）4月11日、紀州藩第二代の徳川光貞（1627-1705）の屋敷に綱吉が御成りした際、光貞の子でのちに紀州藩第三代藩主となる綱教（1665-1705）に「梁楷福祿寿の画幅」を下賜したと言う記述である。梁楷の「福祿寿」とは非常に珍しい画題であるが、実はこれに先立つ天和3年（1683）、梁楷の「福祿寿」の献上を受けていると言う記事を見つけることができる。

（天和三年六月十八日）「美濃守正則致仕によてささげものす。御所に吉光の脇指、梁楷の画幅（福祿寿）。御台所に二条中納言為重卿筆伊勢物語。姫君に冷泉大納言為広卿筆古今集なり。」²⁴

「美濃守正則」とは、小田原藩二代藩主の稲葉正則（1623-1696）のことである。この年に隠居し、子の正往（1640-1716）に家督を譲り、その謝礼として「梁楷の画幅（福祿寿）」を將軍・綱吉に献上したというのである。おそらく綱吉が元禄11年（1698）に、尾張藩・徳川光友屋敷に御成りした際に下賜した「梁楷福祿寿の画幅」とはこのことで、稲葉正則から献上されたものを12、3年近く將軍家の蔵のなかで寝かせた後、再び尾張藩・徳川光友に下賜しているのである。その意味で、これら大名と將軍家間を流通する作品は、おそらくは稲葉家のような家族の物語と密接にむすびついてはいない作品であり、それゆえに、社会のなかで將軍家と大名家の間を往来することに意味があった作品であったと言えよう。

一方これら、將軍家に献上された作品類は、現在『柳営御物集』と呼ばれる複数の写本類が伝来していることで、その大概を知ることができる²⁵。そのいずれかの段階の写本と考えられるものが若狭・酒井家に伝来する『御道具目録』（図11、酒井家文書、小浜市教育委員会保管）であるが²⁶、この写本には物品の値段と思われる書き込みもあり、大名家で献上すべき唐物について、ある程度の値段や鑑定の知識が伝播していたことを知ることができる。

また寛文5年（1665）7月朔日、古河藩第三代・土井利重（1647-1673）のもとより「牧谿月画一幅」が献上された。世にいう瀟湘八景のうち「洞庭秋月図」（小幅）にあたる作品である。この時は「京極中納言定家卿七首和歌一幅」「茶壺（延命）」「唐銅造花瓶（大曾呂利）」「高麗茶碗ささげしとて金三百枚給う」とあることから、当時知行に対してあまりにも多くの家臣団に財政問題に抱えていた

22 原史彦「尾張徳川家の御成」『徳川將軍の御成』徳川美術館、2012年、133-147頁。また『徳川実記』第六編、元禄十年十一月十日条、を参照。

23 『徳川実記』第六編、元禄十年四月十一日条。

24 『徳川実記』第五編、天和三年六月十八日条。

25 代表的な校訂本に、『柳営御物集：校訂』高木文、1933年、がある。そのほか、『徳川家御道具帖』（図12、和1992、東京国立博物館）も同内容のものであるが、明治以降の写本と思われる。この書物に関しては、諸本の校合や成立過程についてまだ解明すべきことが多く、今後の課題とさせていただきたい。また、『名物茶器：玩貨名物記と柳営御物』徳川美術館、根津美術館、1988年を参照。

26 図版については、『再会 ふくいゆかりの名宝たち』福井県立歴史博物館、2015年、123頁、を参照。

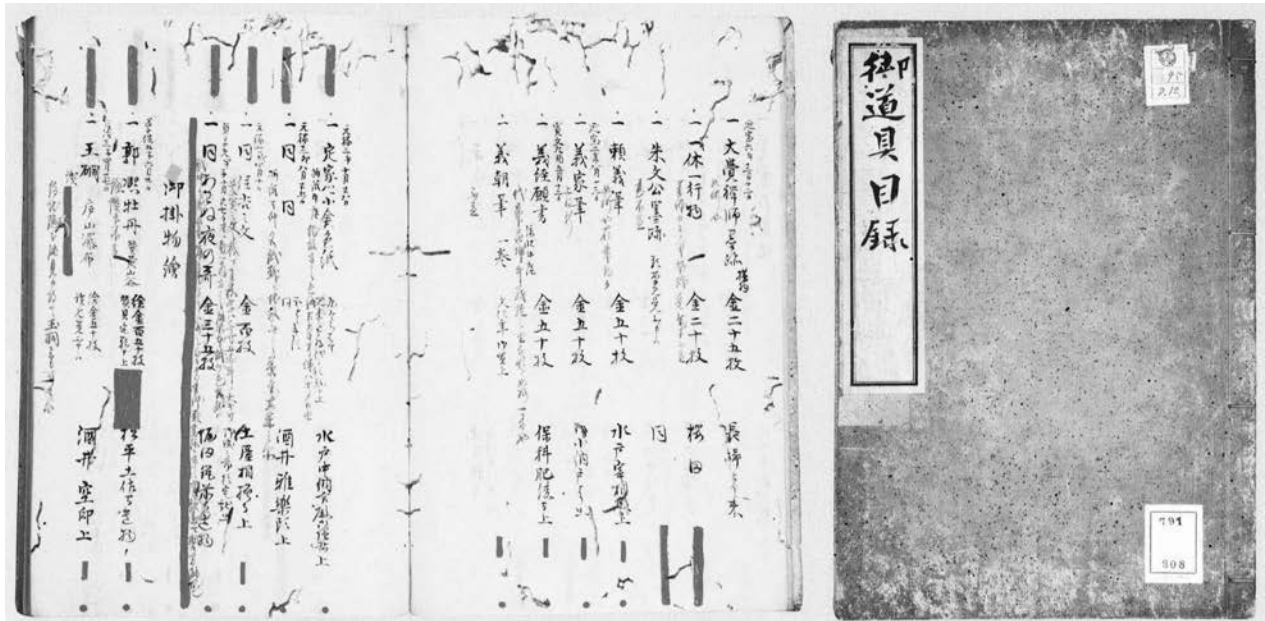
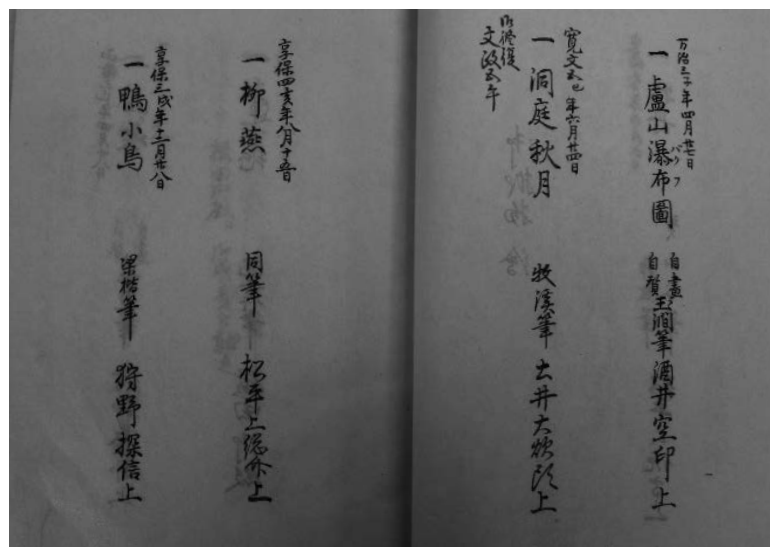
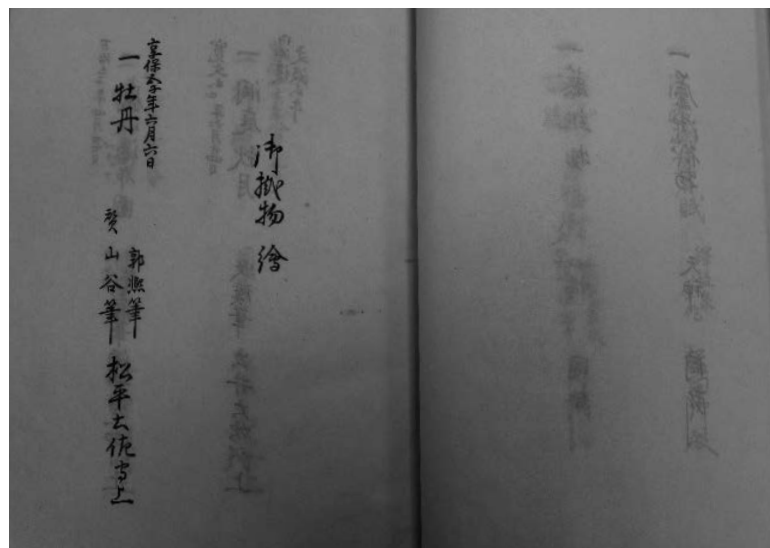
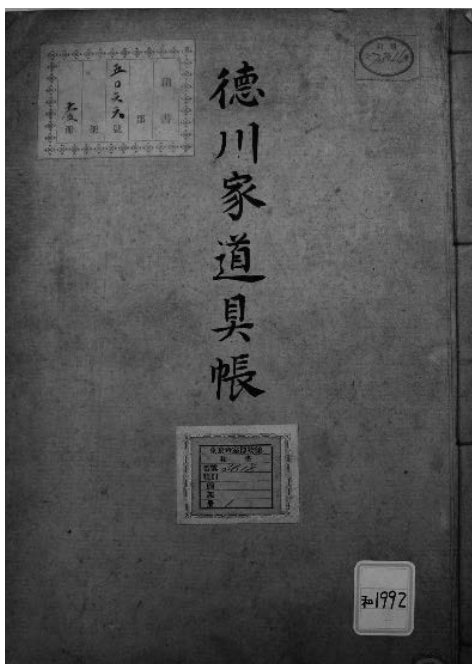


図 11 若狭酒井家『御道具目録』（酒井家文庫、小浜市教育委員会）

図 12 『徳川家御道具帖』
(和 1992、東京国立博物館)

古河・土井家が、所蔵の古画・古器物の献上することによって、金銭的な見返りが行われていたことを知る事ができる興味深い例である²⁷。こうして將軍家の蔵の中には次第に多くの牧谿画が蓄えられていったのだが、よく知られた通り、享保13年（1728）7月、將軍・徳川吉宗は全国から牧谿「瀟湘八景図」を江戸に集め、それを展観するという大変に重要な行事を行うこととなる²⁸。

この時、將軍家には土井利重より献上された「洞庭秋月図」が収蔵されており、牧谿「瀟湘八景図」のうち、「瀟湘夜雨図」は武蔵川越藩主の秋元喬房（但馬守、1683-1738）、「平沙落雁図」は美作津山藩主の松平長熙（又三郎、越後守、1720-1735）、「遠寺晚鐘図」と「江天暮雪図」は紀伊徳川家、「漁村夕照図」は伊予西条藩主の松平頼渡（左京大夫、1706-1738）が所有していたことが知られる²⁹。残りの「山市晴嵐図」と「遠浦帰帆図」は所在不明で見出すことができず、幕府の奥絵師・木挽町狩野家に伝わる模本で補い、さらに、享保14年（1729）には木挽町狩野家五世当主の狩野栄川古信（1697-1731）に臨摸を命じ、南宋四代皇帝・寧宗が詠じた瀟湘八景詩の順にならべて一帖とし、永らく愛玩したことは、すでに多くの先行研究に指摘がなされている³⁰。

ここで再び福井藩・松平忠直が拝領した牧谿「平沙落雁図」へと話を戻そう。当時、牧谿「平沙落雁図」を所有していたのは、美作・津山藩第三代となった数え9歳に過ぎない少年・松平長熙（1720-1735）で、これはかつて家督を継いでいた松平浅五郎が享保11年（1726）に16歳で夭折してしまったため、従弟の又三郎を急遽養子にしたものであった。この処置によって津山藩は改易は免れたが、知行はもとの10万石から5万石に半減させられてしまった。そのような存続の危機の中で、吉宗は牧谿「平沙落雁図」を見て次のように語ったと言う。

「松平左京大夫頼渡は宋の牧谿が筆の瀟湘八景。松平越後守長熙よりは遠祖参議忠直卿、元和元年の役はてて、二条の城に参賀ありし折、台徳院殿よりたまはりし初花の茶入、貞宗の御刀、牧谿が平沙落雁の画に、そのゆゑよしを書そへて御覧に備へしかば、御感大かたならず。永く家に秘蔵すべしと仰下さる。」³¹

牧谿「平沙落雁図」は松平忠直が大坂夏の陣で將軍・秀忠から「初花茶入」とともに拝領したものであるという由来を「書きそへて」あったところ、吉宗はそれを見ていたく感動し、「これは永く家に秘蔵せよ」と言ったと言うのである。吉宗はその代わりに摸写を作ってこれを愛玩し、忠直以来の名家の格式を維持した津山・松平家は、明治になるまで存続していくこととなる。この「書きそへ」が誰によって行われたのか、明らかではない。しかし牧谿を所持し続けることは、忠直の武勲を内外に示すことであり、家の存続の意味を内外に認めさせる

27 （寛文五年（1665）七月朔日）「土井大炊頭利重より牧谿月画一幅。京極中納言定家卿七首和歌一幅。茶壺（延命。唐銅造花瓶（大曾呂利）。高麗茶碗さげしとて金三百枚給う。』『徳川実記』第四篇。

28 なおこの伝来の過程については、高木文『牧谿玉潤名物瀟湘八景絵の伝来と考察』好日書院、1935年、塚原晃「牧谿・玉潤瀟湘八景図—その伝来の系譜—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』17、1991年、を参照。

29 杉本欣久「八代將軍・徳川吉宗の時代における中国絵画受容と徂徠学派の絵画観：徳川吉宗・荻生徂徠・本多忠統・服部南郭にみる文化潮流」『古文化研究』13、2014年、43-120頁。

30 板倉聖哲「解説」『南宋絵画 才情雅致の世界』根津美術館、2004年、165-166頁。

31 『徳川実記』「有徳院殿御実紀」附録巻七。

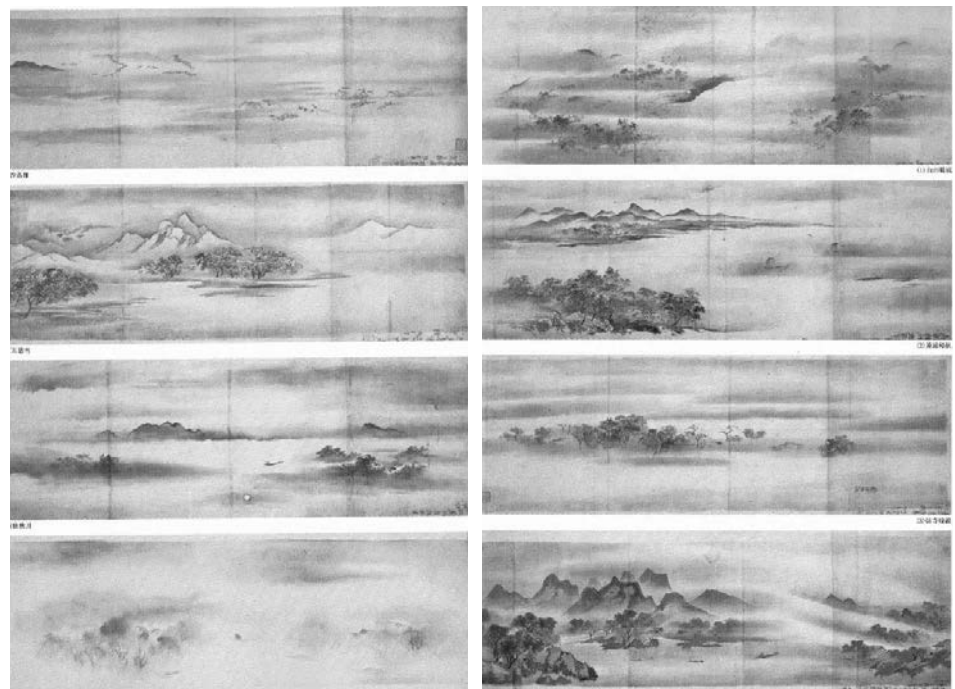
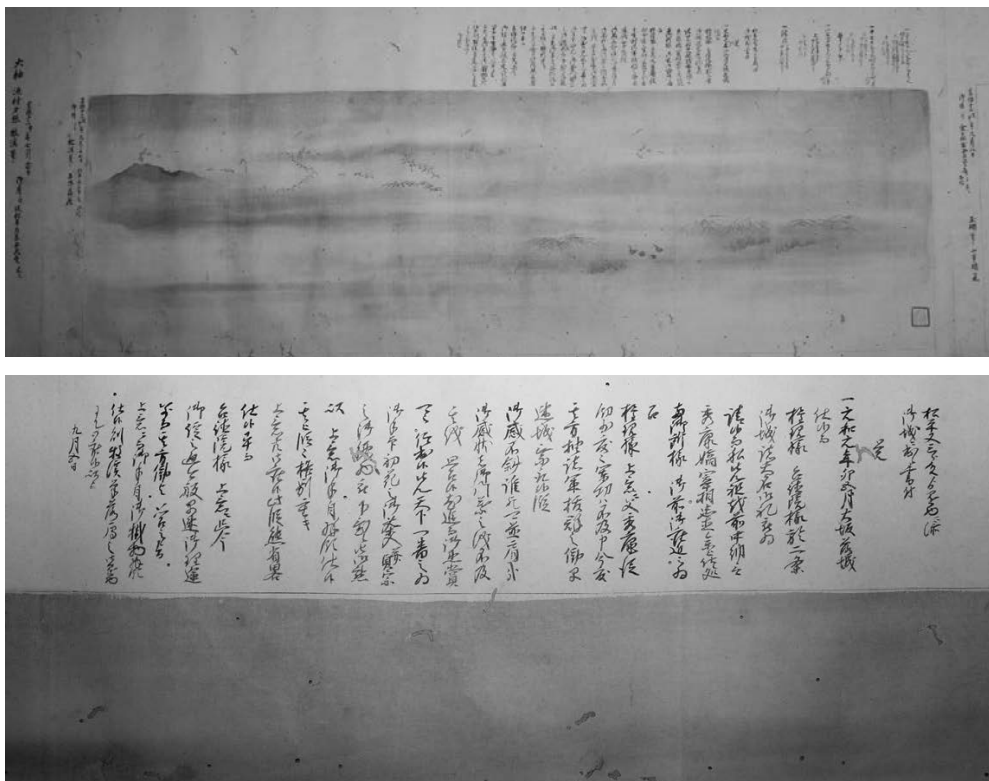


図 13 狩野古信「牧谿瀟湘八景図模」(根津美術館)

図 14 (伝) 常信模「瀟湘八景 十五図 牧谿 玉潤 一巻」(東京国立博物館)
「享保十三年九月十七日 松平又三郎(長熙)殿所持 御用ニテ来ル 牧谿筆 平沙落雁」

元和元年五月十日、徳川家康、秀忠⇒(孫、又従兄弟)⇒松平忠直を謁見、二条城にて「初花之御茶入」、貞宗脇差、「牧谿筆落雁」(平沙落雁図)を拝領



ことでもあったのだろう。おそらく若い藩主をむかえ、その家名の存続に躍起になっていた津山・松平家にとって牧谿「平沙落雁図」を將軍の前に披露することは、単なる美術愛好の機会ではなく、その家名存続と家の歴史を將軍にアピールする絶好の機会となったことは疑いないだろう。こうして牧谿「平沙落雁図」は、江戸時代を通じて津山・松平家に伝来することとなったのである。

おわりに

—東アジアのなかの「中国絵画」の歴史、 あるいは多様な中国絵画史—

明治維新を迎えると、各地の大家は所蔵のコレクションの多くを手放していくこととなる。『旧越前福井藩主松平侯爵家御蔵品入札目録』（昭和4年〔1929〕2月12日、東京美術倶楽部）では、「東山御物 牧谿 芦鷺 常信外題 常信箱 安信添状」「牧谿 柳猿猴」などが売立られ、最も高い値をつけたのは前述した「磁青磁浮牡丹耳付花生」（図6）であったと言い、現在は三井記念美術館の所有となっている。また牧谿「平沙落雁図」（図3）も『子爵松平家御蔵品入札目録』（大正14年〔1925〕6月11日、東京美術倶楽部）において売立が行われ、現在では出光美術館が所有している。これらが売立られたのは、明治以降の家の存続にこのような「唐物」の権威が、もはや必要とされなくなったことも意味していよう。

本稿では、江戸時代の唐物が単なる美術品としてではなく、社会的な意味を持ち、所有者に関連する物語を持ちながら流通する様子を概観した。日本における「唐物」は、単に美しいから愛玩され、伝来してきたのではない。「唐物」というかたち、すなわち、足利將軍家に由来する武家のかたちを持っているということが非常に重要だったのであり、そこに先祖に由来する様々な価値観が積み重なっていくことで、はじめて意味をもつものであったのである。その意味で、江戸時代以降に非常に流行する明清文人画とは、全く違った社会的機能を持っていたと言えるだろう。

本来は中国美術史のシンポジウムにこのような、日本での伝来を長く語ることに、なにかしらの違和感があるかもしれない。20世紀になると中国美術史は近代的な「美術史」によって語られるようになり、日本にある中国絵画も美術的鑑賞の対象として観察されるようになってくる。一方で20世紀におこった「中国学」は、聖賢の道を明らかにする「漢学」から次第に「他者」としての中国研究が行われるようになり（呉論文参照）、長尾雨山や内藤湖南など新しいタイプの中国学者を生み出していくこととなる。

近代の美術史学者が新たに中国絵画を「発見」した例でいえば、矢代幸雄（1890–1975）による牧谿「観音猿鶴図」（大徳寺）の再評価があげられるだろう。矢代は牧谿「観音猿鶴図」を東洋水墨画の最高峰として位置づけ、その「滲

み」の効果からその美的価値を説明し、中国の伝統的な文人画が担っていた筆墨による効果を「異国趣味」として退けたことは³²、よく知られている。中国学の本来性を主張する立場からいえば、文人画の筆墨こそが中国美術の本流であり、最も重要な要素であるべきはずなのだが、イタリア美術史を学んだ矢代はあえて、中国美術史から見れば傍系にすぎない南宋禅林の牧谿の光と影の表現に、新たな近代的・美的な評価を与え、それを語ることに成功したのである。

しかし近代の中国美術史成立の多様な言説の中にあって、中国的な文脈から理解しようとした京都学派の内藤や長尾といった学者たちにとっても、近代美術史的な美術史の美的文脈でとらえようとした矢代や瀧精一のような学者たちにとっても、その共通の敵となったのは、江戸時代までに成立していた「唐物」への多様な言説や価値づけであったことは注目すべき事実であろう。その結果、狩野派の鑑定やそれまで蓄積されていた多様な中国絵画への知識は、その研究の対象となることはほとんどなかったのである。それは、「作品」が制作された当初のコンテキストこそが重要であり、それを伝来してきた社会的な意義は、副次的な意味しか持たないと考えられてきたことを意味する。まさに、近代中国学と近代美術史学の成立にあって、それが共謀するように無視してきた、作品の重要な「生命史」としての一側面であったと言えよう。

では私たちはどのようにして「中国絵画」の歴史を語るべきなのであろうか。例えば、北宋から郭熙の山水図を贈られそれが規範となっていく朝鮮の美術と南宋・夏珪の山水図を規範として絵画史を構築していく日本とは、それぞれ「中国絵画」の歴史のありようが違っている。また例えば、現在、中国では乾隆帝の美術コレクションの研究が非常に進展し、もはや乾隆帝の文化事業を、愚かな皇帝による贅沢三昧と考える研究者はほとんどいない。乾隆帝によって示された18世紀中国における書画や古物の再編事業が、19-20世紀における新しい中国美術史学の成立に非常に大きな基礎となったことが明らかになってきているように、江戸時代における中国書画の知識体系の存在もまた、新たな評価を与えるべき時期に来ているのではないだろうか。中国における近代の知識体系の成立の前提として、19世紀までの世界観が重要なものであったように、日本における近代中国の認識を語る上でも、19世紀までの知識の蓄積を無視することはできないだろう。「中国学」と「美術史学」という二重の近代性に覆いかぶされてしまった日本伝来の「中国書画」には、しかしそれゆえに、多様な東アジア史像を語りうる、無限の可能性が存在しているように感じる。その歴史を丁寧に探索することは、同時に多様な中国絵画の価値観が併存していたことを認識する作業でもあり、そのことでより多面的で魅力的な「中国絵画」史像が描き直せるのではないかと考えているからである。

32 矢代幸雄『水墨画』岩波新書、1969年。

講演 2



漢学と中国学のはざまで —長尾雨山と近代日本の 中国書画コレクション—

呉 孟晋

京都国立博物館

はじめに

明治30年（1897）5月に東京、奈良に次ぐ国立の博物館として「帝室京都博物館」の名称で開館した京都国立博物館（以下、「京博」）は、第11回SGRA チャイナ・フォーラムが開催された平成29年（2017）に開館120周年を迎えた¹。開館の翌月には文化財保護の根幹をなす古社寺保存法が制定され、私たちになじみの深い「国宝」という呼称が指定制度に登場、日本にある「美」の象徴として、同じく120年の時を刻んできた。

京博は、「国宝」を収納する「蔵」として、古社寺保存法、その後継の国宝保存法、そして戦後の昭和30年（1955）に制定された文化財保護法の区分にもとづき、美術品（絵画、書跡、彫刻）や工芸品（金工、陶磁、漆工、染織）、考古資料、歴史資料などの分野ごとに作品を収集、保管・保存、展示、研究してきた。平成29年度末（2018年3月末）の時点では、所蔵品で29件、寄託品で86件の国宝を有する。そのなかには意外に思われるかもしれないが、李唐筆「山水図」（京都・高桐院蔵）、伝徽宗筆「秋冬景山水図」（京都・金地院蔵）、智永筆「真草千字文」（個人蔵）といった中国書画の名品も含まれている。

一般に「国宝」ということばの響きは、日本に固有の文化や芸術を表わす美術品を連想させる。しかし、指定制度としての国宝は、日本の文化や芸術の宣揚ではなく、明治初期の廃仏毀釈に端を発する神社仏閣が所有する宝物、すなわち現在のことばでいう文化財の流出や毀損にたいする保護に主眼を置いたものである。そのため、千件を超える日本の国宝には中国を筆頭として百数十件の海外由来の文化財が含まれている。冒頭で「日本にある「美」と書いた「ある」とは、日本に所在するという意味であり、日本が生み出した「日本の「美」ではない²。

日本にもたらされた中国の書画は、時期によって室町時代までの「古渡り」、江戸時代の「中渡り」、明治時代以降、宣統3年（1911）の辛亥革命をはさむ清末民

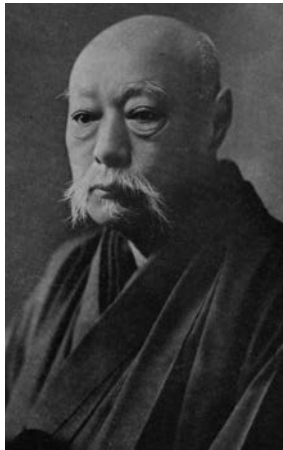


図1 長尾雨山（1864-1942）肖像

国初の中国からもたらされた「新舶載（新渡り）」の三種に分けられる。国宝指定は前者の古渡りの宋元画に多く、先に挙げた京博保管の国宝もこの分類に入る。現在のところ、明清の文人画が過半を占める中渡りの品で国宝はないが、新渡りではその数は多くないものの、李氏筆「瀟湘臥遊図巻」（東京国立博物館蔵）や「説文木部残巻」（大阪・武田科学振興財団杏雨書屋蔵）など、清の宮廷やその周辺のコレクションをはじめとする名品が指定されている。

国宝を頂点とする近代日本の文化財にたいする認識の枠組みにおいて、中国の書画はどのように位置づけられてきたのであろうか。さらにその背景となる、中国由来の学問である「漢学」や文物の「唐物」にたいする理解や評価はどのように変容したのであろうか。本フォーラムの主題である「東アジアからみた中国美術史学」にあわせて考えるならば、文化財をめぐる施策の根底にある学術体系の転換が問題として浮上してこよう。

江戸時代での中国文物の理解と評価について考察した塚本論文を承けて、本稿では、「漢学」と「中国学」のはざまで揺れる近代の京都にて中国書画の鑑定も手がけた漢学者である長尾雨山（名は甲、1864-1942）（図1）が積み重ねてきた思考を手がかりとして、近代日本での中国書画受容の変遷の一端をたどってみたい。

長尾雨山について：「はざま」に生きる

長尾雨山は、名を甲、字を子生、通称・楨太郎といい、雨山以外の別号に石隠、无悶道人、睡道人がある。元治元年（1864）9月18日、高松藩士長尾勝貞の長子として高松で生まれた³。明治21年（1888）、東京帝国大学（現東京大学）文科大学古典講習科卒業後、文部省専門学務局勤務を経て、東京美術学校（現東京藝術大学）、第五高等学校（現熊本大学）、東京高等師範学校（現筑波大学）などで教鞭を執った。しかし、明治35年、教科書疑獄事件に巻き込まれ退職⁴。翌36年から大正3年（1914）まで中国・上海に居住し、商務印書館で編訳を主宰した。このとき、中国の近代出版事業にたずさわるとともに、得意とする詩文で呉昌碩（1844-1927）をはじめとする文人書画家たちとも積極的に交流。帰国後は京都に居を定め、羅振玉（1866-1940）や羅の女婿の王国維（1877-1927）、鄭孝胥（1860-1938）ら清朝の遺臣たちと交わりつつ、中国書画の研究や鑑定を積極的に手がけた。公職には就かず、昭和6年（1931）に平安書道会副会長の役職を引き受ける程度であった。昭和17年（1942）4月1日、数え年79歳にて逝去。

京博に勤務する筆者にとって、長尾雨山は、東洋史学者・内藤湖南（名は虎次郎、1866-1934）とならんで、京都、大阪、神戸を含む関西地域の中国絵画コレクション形成に寄与した功労者の一人として敬慕の対象である。

清朝の学者であった羅振玉は辛亥革命に際会し、親交のあった内藤湖南、狩野直喜（号は君山、1868-1947）、富岡謙蔵（鉄斎の長子で号は桃華、1873-1918）ら京都帝国大学（現京都大学）の中国学者たちの提案を受けて、明治44年（1911）12月から大正8年（1919）5月までの7年半ものあいだ京都に居を構えた。羅は京都にて甲骨文や敦煌文書研究に没頭したが、その生活を金銭的に支えていたのが

中国学に関心をもった関西の新興の財界人であり、羅振玉が中国から携えてきた架蔵の書画であった。なかでも大阪朝日新聞社の創業者の一人・上野理一（号は有竹、1848-1919）は同社の記者であった湖南とのつながりから羅振玉と親しくつきあい、宋拓「十七帖」や惲寿平筆「花陽夕陽図巻」（いずれも京都国立博物館蔵）をはじめとする清初の四王呉惲の書画などを譲り受けた。羅振玉の滞在を契機にして、京都が日本での中国書画の収集および鑑賞・交流の拠点となったといえよう⁵。茶の湯での鑑賞を目的にして、古渡り品が流通していた東京を中心とする関東地域とは異なる展開をみせたのである⁶。

これまで、近代の日本における中国認識の形成には内藤湖南の役割が強調されてきた。たしかに、湖南は京大教授として中国史学から当時の中国をとりまく国際情勢分析、そして中国文物の鑑定にいたるまで中国全般にたいする学問を一手に引き受けていたかの観がある。前出の新渡りの国宝はともに湖南の鑑定や所蔵を経たものである⁷。

しかし、雨山も湖南の友人として彼とともに「説文木部残巻」に跋文を記すなど、中国書画の鑑定や評価を手がけていた。漢詩文に秀でた雨山は、前述のように教科書疑獄事件に巻き込まれるまで東京高等師範学校教授をはじめ官界の要職を歴任したが、退職後は10年を超える上海生活を経て、京都にて在野の立場で文人としての生涯を全うした。

京博では、昭和60年（1985）度以降、雨山の遺族から朱熹筆「論語集註草稿残稿」をはじめとする雨山収集の中国書画約90点を受け入れてきた。さらに、平成22年（2011）には雨山のご遺族から家蔵の雨山にかんする資料の整理と調査を依頼され、同29年度末までに約5000点にのぼる資料の存在を確認することができた⁸。

以下、「長尾雨山関係資料」と呼ぶこの資料群は、雨山あての書簡や本人の直筆草稿を中心に構成されており、雨山の漢詩創作や書画に附す跋文の推敲の跡、書簡でのやりとりをとおした雨山の交友関係までもうかがうことができる。これまで、公刊された雨山の著作は没後に子息の正和氏が雨山の講演録を編纂した『中国書画話』（筑摩叢書27）筑摩書房、1965年）のみであったが、この資料群は新たな著作集を編集できるだけの質そして量を兼ね備えており、近代の日中文化交流の一翼を担った雨山の業績を再評価しうる手がかりとして期待できよう⁹。

近世と近代、江戸から明治、大正そして昭和初期という時間列、日本と中国、東京と京都という空間域、漢学と中国学、官と民といったさまざまな領域の「はざま」にいた長尾雨山は、これまでの近代文化史研究の枠組みからは取りこぼされた存在であった。しかし、新聞界から官学に身を投じた内藤湖南とは対照的に、その後半生を在野で過ごした雨山の中国にたいする認識は、湖南とはまた違った意味で、より実態に即したものであったのではないだろうか。

漢学者として：雨山の漢詩文

ここで、漢学と中国学の違いについて簡単にみておきたい¹⁰。

一般に漢学とは中国の儒学または中国の学問の総称であるが、江戸時代には漢

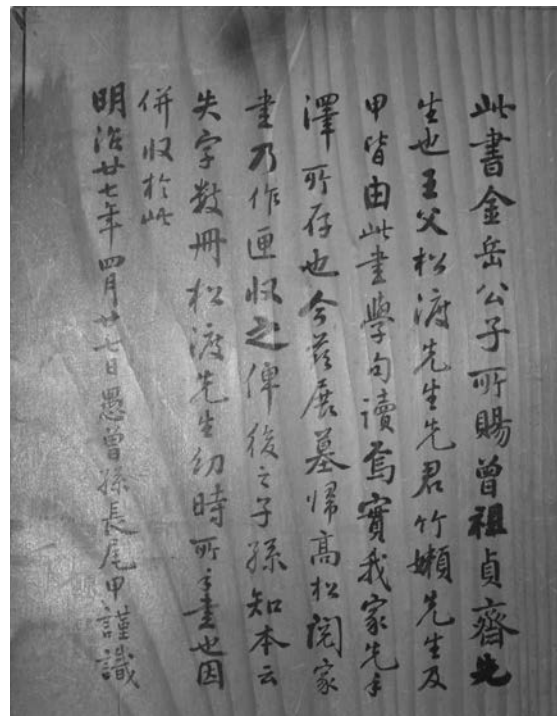


図2 『五経』箱蓋裏墨書 長尾雨山筆（個人蔵）

籍をととして天地の理を説いた中国古典思想を学ぶことで、政経の論を打ち立てたり、芸術的感性を涵養したりする一大知識体系であった。とくに国学や蘭学にたいしての漢学は朱子学や陽明学のように社会統治やその改革のための理論的支柱となったのにたいして、明清の学問で主流であった経学や考証学は一部で断片的な紹介にとどまった。むしろ江戸時代においては全人格的陶冶の象徴として漢詩文の創作がとくに重視された。

一方の中国学とは当時のいわゆる「支那学」で、西洋的な中国研究（シノロジー）を基盤とした。中国にまつわるあらゆる事象を考察の対象とし、中国実地での調査研究をふまえて、政治・経済・文化の各領域に成果を還元していった。日本における中国学の端緒はフランス留学をととしてシノロジーを吸収した狩野直喜や大阪朝日新聞出身の内藤湖南、中国で清朝考証学を学んだ桑原隲蔵（1871-1931）が相次いで京都帝国大学教授に迎えられたことにあり、京都がその拠点となった¹¹。中国哲学・史学・文学の領域をまとめて日本発信の新しい中国学を提唱しようと、大正9年（1920）には学会機関誌として『支那学』を創刊した。

さて、雨山にとって漢学の基礎となったのは、幕末当時の多くの藩士と同じように四書五経を核とした儒学經典であった。

雨山関係資料のなかには雨山が用いた『五経』が残っている。その箱蓋には、明治27年（1894）に雨山が記した墨書があり、雨山の曾祖父・貞齋が高松藩第八代藩主・松平頼儀（よりのり）公の長子である頼該（よしかね、号は金岳ほか、1809-1868）から授かったものであることを伝える（図2）。そのなかの一節、「王父松渡先生、先君竹嬾先生及甲皆由此書学句読焉、実我家先手沢所存也（現代語訳（以下同。〔 〕は訳注を示す）：祖父の松渡先生〔長尾勝元〕、父の竹嬾先生〔勝貞〕そして私は皆、この書で漢文を学んだ。実に我が家系が愛蔵してきたものな

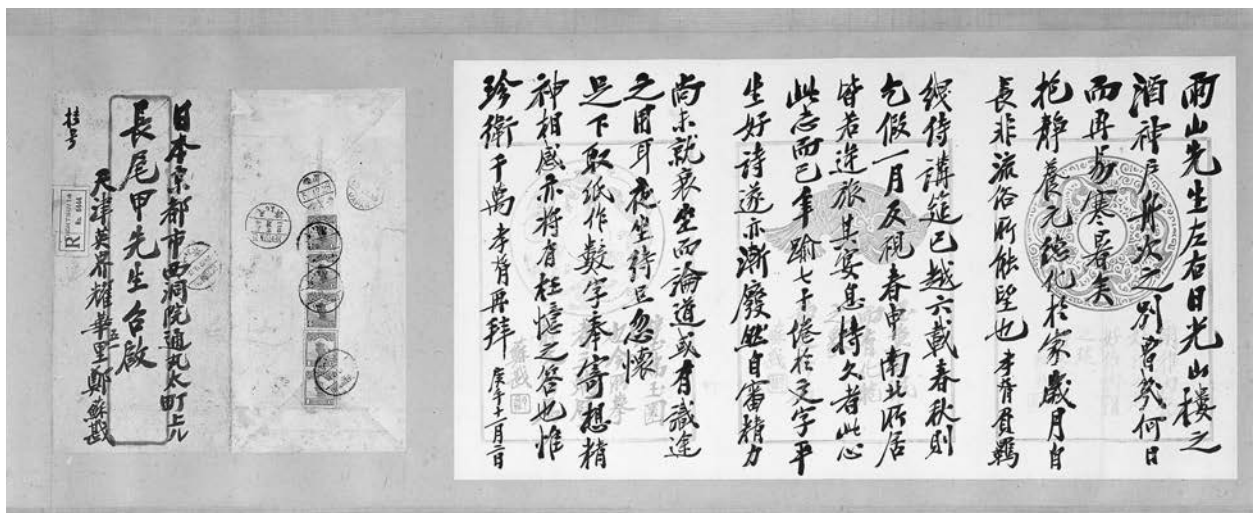


図3 鄭孝胥筆「鄭孝胥寄雨山尺牘卷」(京都国立博物館蔵)(部分)

のである)」は、長尾家の一貫した家学の流れを示す。雨山の父の勝貞(号は竹嬾)も頼該の御側役として仕え、詩書に巧みであった。

実際、早くから雨山の漢詩文は高く評価されていた。その契機をつくったのは、清末の遺臣にして満州国の初代国務院総理となった鄭孝胥である。

鄭孝胥は光緒17年(1891)に清国駐日本大使館書記官、その後、神戸・大阪総領事となったのをはじめ、しばしば来日しており、日本の政財界や文化界に知己が多かった。雨山は東京帝国大学卒業後の明治24年、すなわち鄭が日本に赴任してきた1891年の12月12日に、帝国大学などで中国語を教授していた張袖海(名は滋昉、1839-1900)の紹介で鄭を訪ねている¹²。

吉川幸次郎によれば、鄭孝胥は江戸時代から明治半ばまでの日本の詩文のなかで、「此の都(東京)にて文士と号するものは、浮躁にして多くは実ならず。盛名あること頼襄(頼山陽)の如き、語助も未まだ完悉ならず」、「其の粗(ほ)ぼ可なる者を求むれば、百に未まだ一つを得ず。吾れに善きものに長尾有り、後より起こるも実に美質」と回想している¹³。漢詩文の文法において、雨山は江戸時代後期の儒者で尊王攘夷運動に大きな影響を与えた頼山陽(1781-1832)よりも評価されていたのである。「鄭孝胥寄雨山尺牘卷」(京都国立博物館蔵)(図3)は雨山宛てに鄭孝胥が認めた書簡20通あまりを卷子に表装しなおしたもので、明治末大正初期から鄭が満州国に渡った昭和10年代まで継続して文通していたことがわかる¹⁴。鄭は雨山に自身の詩文の推敲を依頼しており、そのいくつかは鄭の文集『海藏樓詩集』(1937年)に収録されている。

現在、雨山の漢詩文をまとめて読むことができるのは、雨山が明治30年(1897)から同32年まで勤務していた熊本の第五高等学校の校友会誌『龍南会雑誌』である。

たとえば、「下保津川記」は京都の保津川下りを詠んだもの¹⁵。「水得石而勢変、石得水而態奇、水石相得而極天下奇変、吾得之於保津川焉(水は石によって勢いを変え、石は水によってその形を奇なるものとする。水と石はお互いを得ることによって、天下の奇景を形づくる。私は保津川にてこのことを体得し

た)」ではじまる一文は、後年、「石隠」と号した雨山の奇石愛好の癖がしのばれる。詩文には、漢学者の南摩羽峰（名は綱紀、1823-1909）、土屋鳳洲（名は弘、1842-1926）、張袖海らの講評があり、南摩は、「今読此篇、句々飛動、字々靈活、能写其真、使人復瞿然驚悸、何等藻思、何等筆力（いまこの文章を読むと、句は飛ぶがごとく動きがあり、字は魂が吹き込まれたかのように生き生きとしている。その〔保津川の景観という〕真の姿がよく描写されており、人は何度も驚かされるであろう。これに匹敵する詩文の才能、そして筆力はあるであろうか）」と評した¹⁶。余談ながら、このとき、文豪の夏目漱石（1867-1916）とは同僚であり、雨山はよく漱石の詩文を添削していたという¹⁷。

当時の雨山の詩作にたいする考えは、同じく『龍南会雑誌』に寄せた次の一節からその一端をうかがうことができる。

是れ今の詩は古の詩と異なる所以なり其所由何ぞや、其性情其時俗に随ふて汙下鄙俗に流るればなり、故に予が志すべしと云ふところの詩は古の詩なり、今の詩にあらざるなり、能く古の詩に志して性情を陶鑄すれば則ち忠孝敦厚の美性を涵養するを得へく、古の詩を学んで之を作為すれば則ち温優和雅の至情を發揮するを得べし、孔子が伯魚に教へて『不学詩。無以言（詩を学ばざれば、以て言ふことなし）』と云へるも亦是を以てなり、詩も亦載道の器なり、豈文墨游戲のみならんや¹⁸。

雨山は、雅宴で披露する「文墨游戲」な漢詩ではなく、「載道の器」としての「古の詩」を志していた。その思考の展開は同誌連載の「支那古代の詩変を論ず」などに詳しいが、ここではふれない¹⁹。雨山の漢学の根幹にあるのは、「古の詩」をよく学ぶことで「性情を陶鑄すれば」、「忠孝敦厚の美性を涵養する」ことができるという、全人格的な陶冶を目指す儒学的思考であった。

中国学者として：「態度」としての中国学

それでは、長尾雨山の詩文を核とした漢学はどのようにして「中国学」につながってゆくのであろうか。

いわば、近世的価値観から近代的なそれへの転換について、雨山は自覚的に引き受けていたかどうかはわからない。当時の状況から単純化していえば、京都帝国大学が打ち出した中国学にたいして雨山は東京帝国大学の卒業であり、東大系はしばらく漢学を柱としており、京大系と比べて中国学への合流は遅れていた。

しかし、雨山は高等師範教授であった明治35年（1902）に教科書疑獄事件に巻き込まれ、収賄の容疑で拘引されてしまう。実際のところは冤罪であったことはすでにふれたが、漢学者として嘱望されていた雨山の未来はここでいったん途絶えることとなる。翌36年12月に雨山は中国の上海に渡り、疑獄事件の当事者でもある出版社の金港堂が合弁相手とした商務印書館で教科書編集（たとえば『最新国文教科書』1904年など）や小学校教員養成にかかわった。大正3年（1914）12

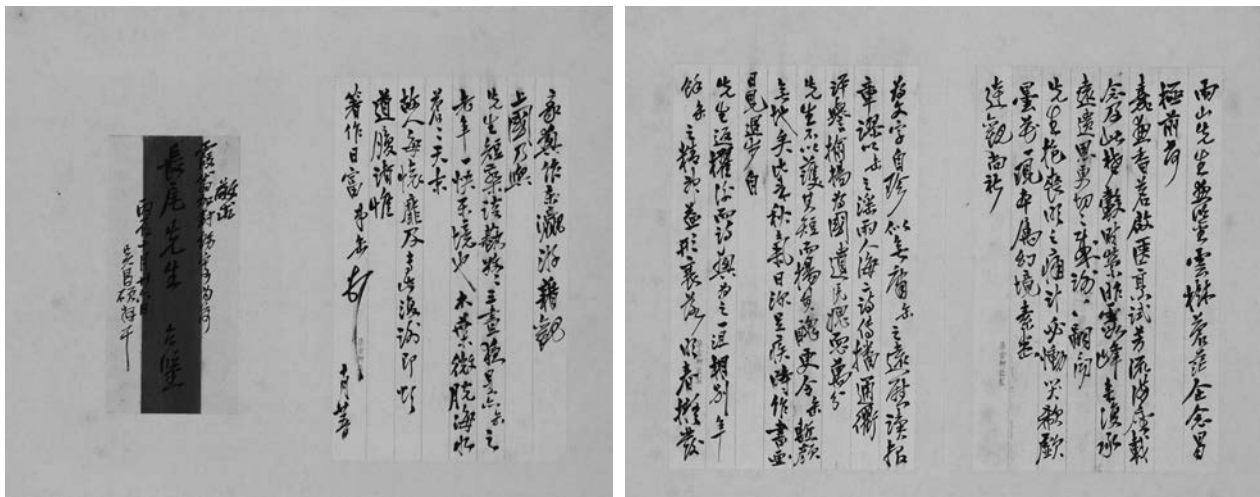


図4 呉昌碩筆「缶廬詩翰」（京都国立博物館蔵）（部分）

月に帰国するまで11年もの間、雨山は上海で暮らしたわけであるが、この「蟄居」ともいえる時期を経たことにより、雨山のなかで自らの学問が無理なく「中国学」に変化していったのではないだろうか。

雨山が上海で生活していた当時、在留日本人の数も飛躍的に増加しており、雨山の滞在そのものが珍しいわけではない。しかし、明治34年（1901）にアジア主義を掲げていた東亜同文会が同地で開学した東亜同文書院のほかに広い意味での「中国学」を志す日本人留学生が一般的ではなかった時期に、清濁さまざまな事象にかかわる一匹狼的な「大陸浪人」のほかに現地社会に深く溶け込むことができた日本人はそれほど多くはない。

中国美術の収集では、明治26年（1893）に雨山の東大時代からの友人である岡倉天心（名は覚三、1863-1913）が中国旅行に出かけている²⁰。早崎稔吉（号は天真、1874-1956）は天心の助手として中国旅行に同行して以来、頻繁に日中間を往来した。また、明治30年に真宗大谷派の中国布教にともない渡清した桑名鉄城（名は箕、1864-1938）は呉昌碩の知己を得て印人として自立する一方で、書画収集に傾倒し、八大山人筆「安晚帖」（泉屋博古館蔵）に代表される住友財閥の住友寛一（1896-1956）のコレクション形成に影響を与えていたことがよく知られている。漢学の素養をもつ兩人とも現地の文人社会の交友圏のなかにいたが、高等師範学校の漢文教授であった雨山の学識は彼らを凌駕していた。

雨山にとって上海での生活では、これまで培ってきた漢学の知識や知見が大いに役に立ったことは想像に難くない。光緒31年（1905）に上海に戻った鄭孝胥は翌年から商務印書館の経営にかかわり董事をつとめているが、滞在から2年が経った雨山はすでに上海の文人社会の交友圏に加わっている。その中核となったのは数多くの詩会で交流を深めた呉昌碩である²¹。

呉昌碩が雨山に宛てた書簡の一部は、「缶廬詩翰」（京都国立博物館蔵）にまとめられている²²。これは上海からの帰国後の大正5年（1916）に雨山が受領した書簡を帖の形式に表装したもので、そのうちの1通は、「自先生返權後、而詩興為之一沮、相別年余、缶之精神、益形衰落、明春擬發豪興、作東瀛游、藉觀上国、乃与先生、短檠談芸、孜孜三昼夜、是亦缶之老一快樂境也」とある（図4）。73歳の



図5 沈周筆「白石翁詩冊」(京都国立博物館蔵)(部分)

呉昌碩が雨山の詩才を賞賛し、雨山への友情を吐露している。

呉昌碩との交友は、雨山にとって多くの伝手を必要とする現地の収蔵家とのやりとりにも有益であったのだろう。たとえば、雨山の旧藏品に明時代の蘇州を代表する文人画家・沈周(号は石田、白石翁など、1427-1509)の筆とする「白石翁詩冊」(京都国立博物館蔵)(図5)がある。この書帖の題箋は「辛亥長夏」すなわち宣統3年(1911)陰暦6月に揮毫した呉昌碩の筆である。「虬斎」なる人物(著名人では留日経験のある革命家・沈翔雲(字は虬斎、1888-1914)がいる)に宛てた一帖が雨山の手許に残ったというわけである。民国2年(1913)に呉昌碩が杭州の印学結社・西泠印社の社長に就任するにおよび、雨山は書家の河井荃廬(1871-1945)とともに社員に迎え入れられた。

雨山の中国学への態度が端的にあらわれているのは、晩年の昭和12年(1937)に副会長をつとめた平安書道会での講演のなかにみえる次の一節である。

専門の書家とか、あるいは学者とかいう者はもちろん、さもなくとも金文ということにつきましては一般の人も常識的に大いに尊重すべき理由を知らなければならぬものと私は考えます。というのはこの三代の鐘鼎尊彝のごとき貴重なもので、しかも学問上最も大切な文字を刻されておところの品物、それをたとえば鼎などには中に灰を入れて鉄瓶を掛けたりして大いに自慢しておるといふのは、日本人に普通多く見かけるところであります。いかにも贅沢な趣味といえはいえるかもしれませぬが。三代の銅器の尊ぶべきゆ

えんは単に数千年以前の遺物であるというのみではない、それに刻してある文字が、学問研究の上につきまして大いに大切なものであります。しかもこれを没却して、中に灰を入れ鉄瓶掛けにしておるというのはわれわれの目から見ればはなはだしく非常識に考えるのであります。まずそういうところから考えを改めてもらわなければ困る、ゆえに常識的に金石文字の尊ぶべきものであるということを今申し上げたわけであります²³。

雨山は、金石研究のための貴重な資料となるはずの青銅器を茶道での鉄瓶掛けに転用する日本の「中国趣味」が本来の学問としてのあり方から外れた逸脱的なものであることを上海で体得していた。雨山は「態度」としての中国学を日本に持ち込もうとしていたのである。

実際、漢学から中国学への転換は単線的なものではなかった。江戸時代までの日本における漢学は朱子学をもとにして威信財としての「唐物」を収集する理論的支柱であった（塚本論文を参照のこと）。一方で先にふれたように明治時代以降の中国学が現地での実地調査を基盤とし、膨大な文献や資料を入手して中国の実像を理解しようとする学問体系であるならば、雨山は十二分にその機会をいかしたといえる。足しげく古書肆に通っては膨大な量の漢籍を収集したり、これまで日本では目睹できなかった宋元明清で正統とされる流派の書画を日常的に観覧したりすることも含まれている。

雨山にとっての「中国学」とは、美術品をまえにしてそれを自らの権威を高める手段とするのでもなく、倒錯的な態度で鑑賞に耽るのでもない。研究のための「資料」として客観的にそれらに向き合うことで、これまでとは一線を画す、雨山独自の書画鑑定が確立したといえよう。

雨山と湖南：近代京都での書画鑑定

大正3年（1914）の帰国後に長尾雨山が居を構えたのは、清朝の遺臣・羅振玉が学究生活を送っていた京都であった²⁴。

商務印書館の日本資本との合弁解消により上海生活を切り上げた雨山にとっても、次なる居所として京都を選んだのは自然ななりゆきであった。政治関係の書籍の出版を手がけていた博文堂がのちに首相となる犬養毅（号は木堂、1855-1932）をとおしておもに関西地域で中国書画売買の仲介に乗り出すと、雨山は内藤湖南とともにその指南役に名をつらねた。このとき、雨山は無役であったが、博文堂は美術コロタイプ出版も手がけており、上海で出版事業にかかわった雨山の経験は存分にいかされたことであろう²⁵。

京大に所属する湖南とは異なり、在野に生きた雨山はさまざまな「はざま」で生きてゆかなければならなかった。

没後に『支那絵画史』（弘文堂、1938年、2002年にちくま学芸文庫より再刊）が出版された湖南にたいして、雨山の著作は先にふれた『中国書画話』のみである。事実、雨山は書画鑑定の所見の多くを画卷や画帖、法帖の末尾や作品を附属

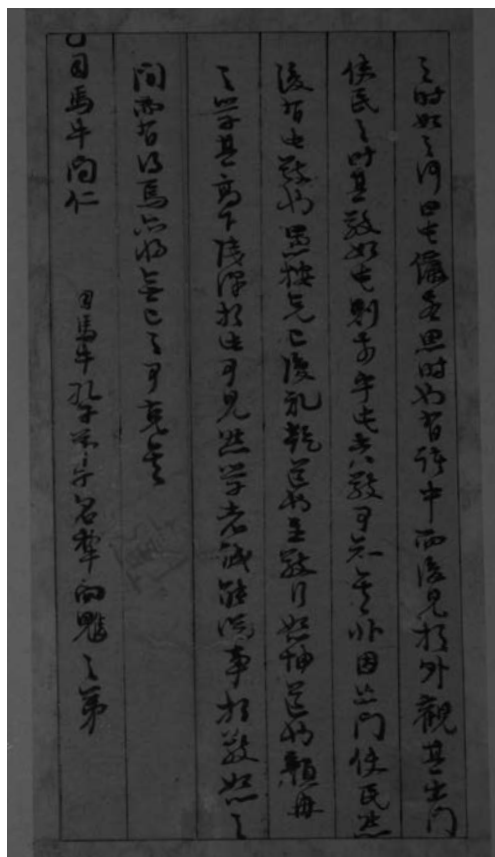
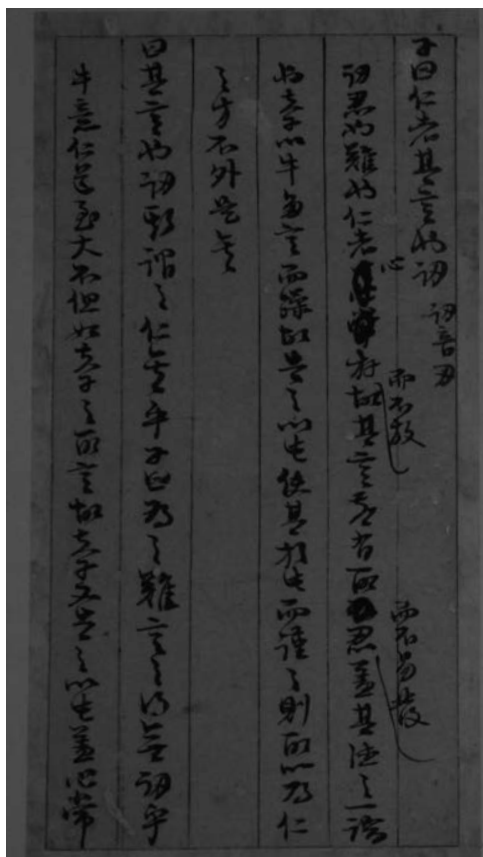


図6 朱熹筆「論語集註草稿残稿」
(京都国立博物館蔵) (部分)

する保存箱に記した。雨山の書画観を知るためには、こうした跋文や箱書きを手がかりとしなければならないのである。

雨山が書き残した識語は、京博上野コレクションのほかにも大阪市立美術館に寄贈された東洋紡社長の阿部房次郎（号笙洲、1868-1937）のコレクション、現在、三重県四日市市にある澄懷堂美術館が管理する、実業家にして農林大臣をつとめた山本悌二郎（号は二峯、1870-1937）のコレクションに多くみられる。

それでは、雨山本人が収集した書画の白眉をなす、南宋の大儒・朱熹（1130-1200）の筆による「論語集註草稿残稿」（図6）を例に雨山が著した跋文をみてみよう。この帖には別紙で雨山の跋文が附属する（図7）。

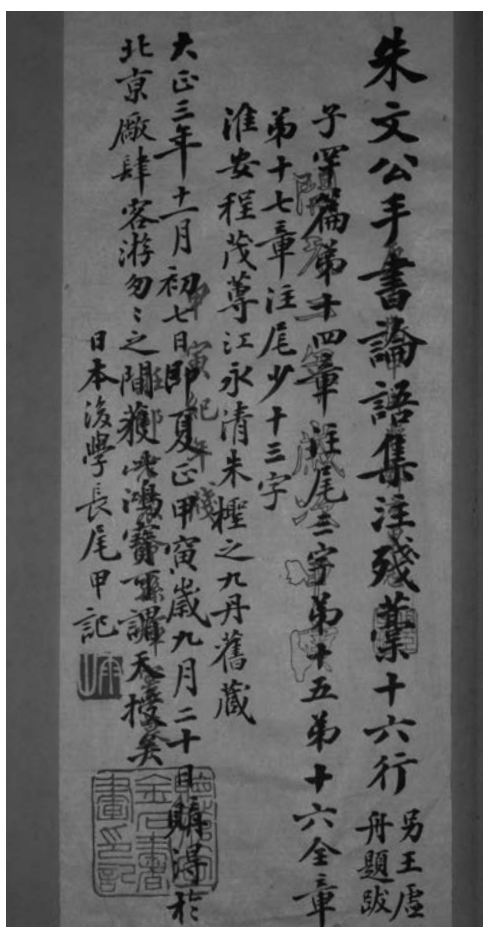


図7 「論語集註草稿残稿」跋
長尾雨山筆

朱文公手書論語集註残稿十六行、另王虚舟題跋、子罕篇十四章注尾三字、第十五、第十六全章、第十七章注尾少十三字、淮安程茂蕓江、永清朱樸之九丹旧蔵、大正三年（1914）十一月初七日、即夏正甲寅歲九月二十日、購得於北京廠肆、客游匆匆之間獲此、鴻宝可謂天授矣、日本後学長尾甲記²⁶。

朱文公〔朱熹〕の直筆の「論語集註残稿」十六行は、

王虚舟〔王澐〕の題跋があり、「子罕篇」第十四章の末尾の三字、第十五、第十六の全章、第十七章の末尾の十三字を欠いている。淮安の程茂（字は蕁江）、永清の朱攄之（号は九丹）の旧蔵である。大正三年（1914）十一月初七日、即ち旧暦の甲寅の歳の九月二十日、北京の骨董街である琉璃廠の古書店にて購い得た。旅行中の慌ただしいなかでこれを入手できたのは、鴻宝〔大いなる宝、秘蔵の書籍〕が天から授けられたと言うべきであろうか。日本の後進の学徒である長尾甲が記す。

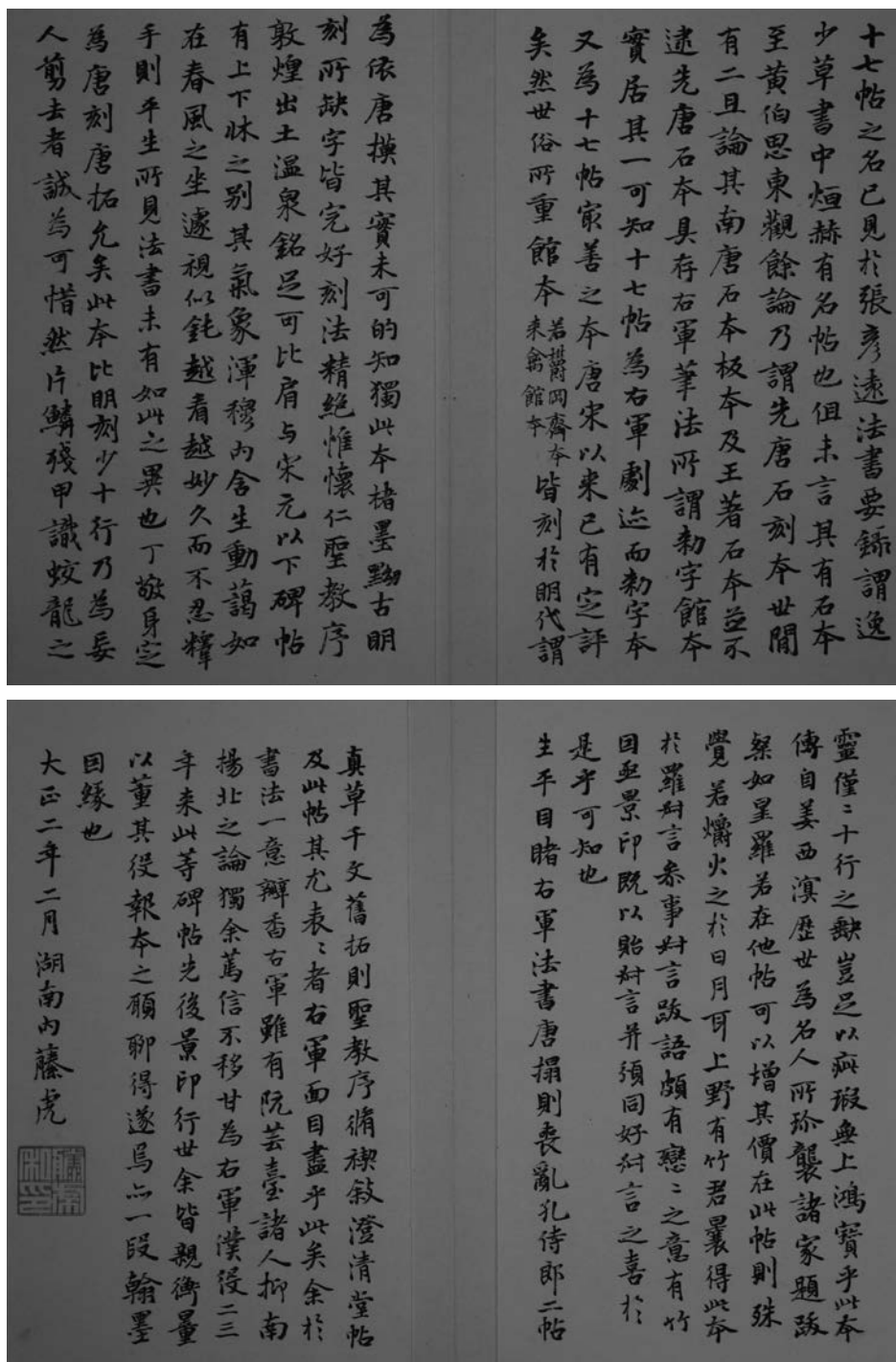


図8 宋拓「十七帖」跋 内藤湖南筆（京都国立博物館蔵）



図9 郭界筆「幽篁古木図巻」(京都国立博物館蔵)

雨山が上海を発つ直前に記したこの識語は、簡潔にして鑑定の要を得ている。目の前にある作品とそれを比較する原典資料を校訂し、その異同を記す。歴代の所蔵者を記し、伝来の正統性を示す。そして最後に自らがこの作品とどのようにかわりをもったのかを明らかにする。

たとえば、資料との校訂については、大正2年(1913)に湖南が上野コレクションの「十七帖」の跋文帖に記した以下の跋文と同曲であり、ともに「大いなる宝」、「秘蔵の書籍」を意味する「鴻宝」の語を用いている。「此本比明刻少十行、乃為妄人剪去者、誠為可惜、然片鱗殘甲、識蛟龍之靈、僅僅十行之缺、豈足以疵瑕無上鴻宝乎(この本は明時代の刊本と比べて十行少ない。心ない者が切り取ったのであり、誠に惜しむべきことである。しかしその片鱗は冒頭の部分に残っており、「蛟龍の靈」[十分に発揮できない才能を指すのか]を知るのである。僅かに十行を欠く、その瑕疵をもって鴻宝としての価値ないといえることができるか)」(図8)。

江戸時代以前の古渡りや中渡りの中国書画の鑑定の多くは御用絵師の狩野派による極書きであり、「探幽縮図」をはじめとする自派のなかにある粉本との様式比較で真贋の鑑定をおこなっていた。雨山や湖南の鑑定は、原典や画人の著録、目睹した作品を資料としてもちいる考証学的手法を採り入れた点で画期をなしたのである。

もっとも、学者として文献に過度に依拠する手法は、その後の研究によって知見が覆ることもある。長尾雨山が郭界筆「幽篁古木図巻」(京博上野コレクション蔵)(図9)の箱蓋裏に記した識語は次のとおり。

図絵宝鑑云、元郭界、字天錫、又字祐之、号北山、京口人、画竹木窠石、此卷所写幽篁古木、筆力雄豪、尤有逸氣、可知其得意之心也、引首宋仲温隸題、古勁蒼雅、尚無衡山以後俗態、卷尾翁覃谿七古、妙饒神韻、可並称三絶矣、丁巳(1917)榴華月、長尾甲觀²⁷。

『図絵宝鑑』には、元の郭界、字は天錫、またの字は祐之、号は北山といい、京口の人、竹木や窠石[奇石]を描いた、とある。この画卷で描かれている幽篁古木は、筆力が雄豪であり、さらに逸気があるので、[思うように

描けたという] 筆者の会心がうかがえよう。引首[巻頭の箇所]には宋仲温[宋克]の隸書の題があり、古勁にして蒼雅で、衡山[文徵明]以後の卑俗な気風は感じられない。巻尾には翁覃谿[翁方綱]の七古[七言古詩]があり、妙饒にして神韻である。郭畀に宋克、翁方綱をあわせて「三絶」と並べて称することができよう。丁巳[大正6年(1917)]の年の榴華月[旧暦の10月]に、長尾甲が観た。

元の文人画家・郭畀(1280-1335)について雨山は元時代の著録である夏文彦撰『図絵宝鑑』(至正25年(1365)自序)から「字天錫、又字祐之、号北山、京口人」としたが、原本は「郭畀字天錫、京口人、画竹石窠木」(元部)である。長尾跋の「又字祐之、号北山」は他所からの追記したのであろうか。戦後になって、郭畀の伝記が元初の収蔵家で王羲之の「快雪時晴帖」(台北故宫博物院蔵)を収蔵したことで知られる郭祐之(字は北山、号は快雪斎主人)と混同されていたことが明らかになっている²⁸。本図巻の清時代の考証学者・翁方綱(1733-1818)による跋や雨山箱書は郭畀の号を「北山」としており、そのため、本来、祐之による趙孟頫(1254-1322)や鮮于樞(1256-1301)との交友も畀の事績とされ、元時代の大文人としてその虚像が誇張されてしまった感があるのは否めない。

在野の学者として：書画鑑定の「はざま」

箱書きとは、極言すれば、真贋を問わずとも作品の伝来に価値を付与さえすればよいものである。公職に就いていなかった雨山にとっては、鑑定は生計のひとつであり、たとえ名画でなくてもなんらかの文句を記さなければならなかった。

たとえば、四幅対の無款の「花卉図」(個人蔵)の箱蓋には、「是係明季清初名手所画、筆致意匠並臻絶妙、惜無款記、然不足為名画病也、己未穀雨、長尾甲観(これは明時代から清時代初めの名手が描いたものである。筆致と意匠はきわめて絶妙である。惜しむらくは筆者の署名である款記がないことだ。とはいえ、名画が陥るような病弊[生氣のない描写を指すのか]はみられない。己未[大正8年(1919)]の年の穀雨[二十四節気の第六。旧暦3月ごろ]のときに、長尾甲が鑑賞した)」と記している(図10)。このとき、雨山は「筆致と意匠はきわめて絶妙である」と美辞麗句を記すのみで、具体的な論評は避けていた。

上野コレクションにある「柘榴図」(京都国立博物館蔵)(図11)は、前述の沈周の落款を有する一幅で、その箱書きは京都での雨山の交友を示すものとして興味深いものがある(図12)。

石田先生山水之妙、夫人所知、而至花果亦極有姿致、昔人云有明工写生者石田為第一、信然、此幀原為冊頁、滬上猾賈拆售以牟利、羅叔言嘗獲所餘數頁、割其一以贈 有竹先生即此也、時又以柿実図贈湖南博士、僕亦得水仙図、它日各相携以合觀、以話墨緣、不亦樂乎、己未(1919)春仲、長尾甲識。



図 10 「花卉図四屏」箱蓋裏墨書
長尾雨山筆（個人蔵）



図 12 「柘榴図」箱蓋裏墨書
長尾雨山筆



図 11 伝沈周筆「柘榴図」（京都国立博物館蔵）

石田先生〔沈周〕の山水の妙味は皆人が知るところである。花卉や果実に至ってはその姿かたちをよく捉えている。昔の人は明代で写生を巧みにするのは石田〔沈周〕が第一であるといっていたが、信（まこと）にそうである。この図はもともと画帖の一頁で、滬上〔上海〕の猾賈〔狡猾な商人〕がばら売りして利益をむさぼった。羅叔言〔羅振玉〕は数頁を手に入れ、そのうちの一図を有竹先生〔上野理一〕に贈ったのがすなわちこれである。このとき、「柿実図」は湖南博士〔内藤湖南〕に贈られ、私もまた「水仙図」を得た。後日、それぞれが軸を携えてきて見せあった。墨縁を話すのもまた楽しからずや、というべきであろう。己未〔大正8年（1919）〕の年の春の盛りに、長尾甲が記す。

本図は今日では伝称作品とみなされるが、当時は沈周の真筆として認識されていた。雨山は箱書きで、羅振玉の手許から流れた画帖を上野理一と内藤湖南そして雨山で分割した「墨縁」を語っている。雨山が本図を真筆と信じて疑わなかったかどうかは、今となっては知る由がない。しかし、雨山は四人の友情を重ねていたからこそ、この一文は推敲に推敲を重ねていたのはたしかである。「長尾雨山関係資料」には、この跋の草稿が残っており、そこには記すべき内容を定めてから、いくつかの語を重ねて加飾していく過程をうかがうことができる（図13）（【 】は改変を示す）。

石田先生所作花果妙饒姿致、【昔人云有明工写生者石田為第一、信然、】此幀原為冊頁、【滬上】猾賈拆售以【牟<射】利【羅叔言嘗<前獲】所餘數頁、割其一以贈 有竹先生即此也、時以柿実図贈湖南、僕亦得水仙図、它日各相携而合觀、【以話<応有創】墨縁【不亦樂乎<也】。

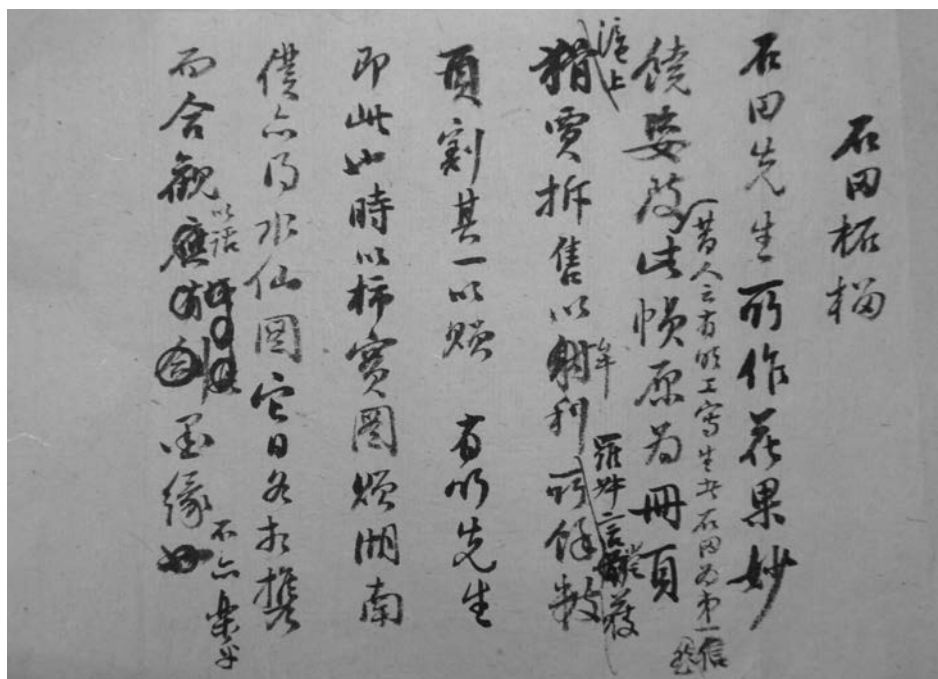


図13 「柘榴図」箱蓋裏墨書草稿 長尾雨山筆（個人蔵）



図14 沈周筆「九段錦図冊」のうち第六図「蘆汀採菱図」（京都国立博物館蔵）

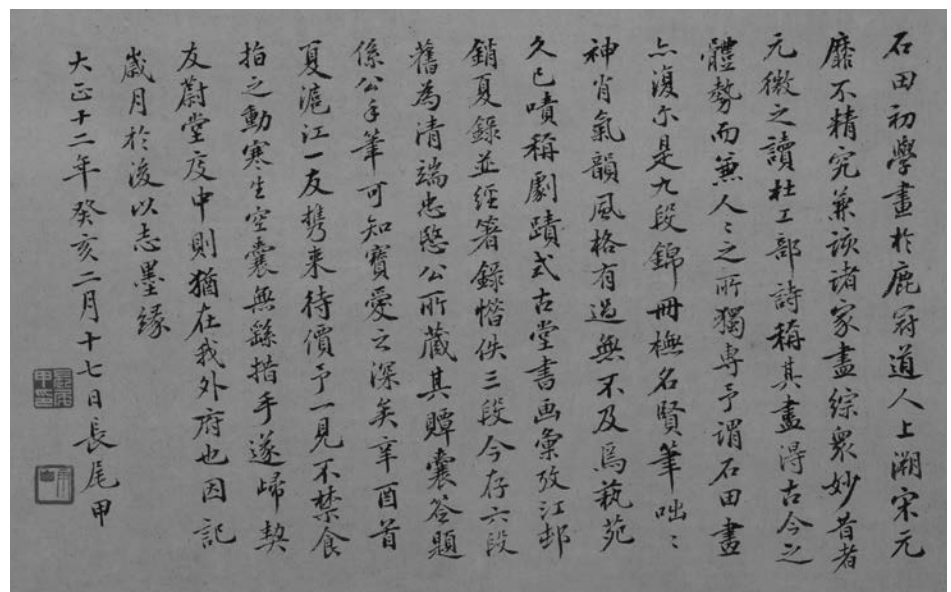


図15 「九段錦図冊」跋 長尾雨山筆

沈周にまつわる「墨縁」は、初期の名品として知られる「九段錦図冊」（重要美術品、京都国立博物館蔵）（図14）につながる²⁹。帖末に雨山が記した跋文では、同じく「墨縁」の語で次のように名品との邂逅を回想している（図15）。

石田初学画於鹿冠道人、上溯宋元、靡不精究、兼該諸家、尽総衆妙、昔者元微之讀杜工部詩、称其尽得古今之体勢、而兼人人之所独専、予謂石田画亦復爾、是九段錦冊、撫名賢筆、咄咄神肖、氣韻風格、有過無不及焉、芸苑久已噴稱劇蹟、式古堂書画彙攷、江邨銷夏録並經著録、惜佚三段、今存六段、旧為清端忠愍公所藏、其贖裏答題、係公手筆、可知宝愛之深矣、辛酉（1921）

首夏、滬江一友携来待価、予一見不禁食指之動、寒生空裏、無繇措乎、遂歸契友蔚堂度中、則猶在我外府也、因記歲月於後、以志墨緣、大正十二年(1923) 癸亥二月十七日、長尾甲。

石田〔沈周〕は初め画を鹿冠道人〔杜瓊〕に学び、上は宋元にまで遡り、刻苦精勤しないことはなく、諸家を兼ね備え、総衆の妙を尽くしている。かつて元微之〔元稹〕は杜工部〔杜甫〕の詩を読み、尽く古今の氣風を体得したと称され、人びとがそれぞれ専門とするところをすべて兼ね備えた。私は石田の画でそうであるものがこの「九段錦冊」であると思う。名賢の筆を模写して、咄咄として神肖、氣韻と風格、及ばないところはどこにもない。芸苑では久しくこれを劇蹟〔名宝〕と称しており、『式古堂書画彙攷』、『江邨銷夏録』には著録がある。惜むらくは三段〔三図〕を失っており、今は六段〔六図〕のみ存在する。清の端忠愍〔端方〕公の旧藏であり、その題字は公の直筆であり、この宝を愛する深さを知ることができよう。辛酉〔大正10年(1921)〕の年の首夏〔旧暦の4月〕、滬江〔上海〕の友人が携え来て私に見せて価格を問うた。食指が動くのを禁じ得なかったが、寒生〔雨山のこと〕の空裏に方策はなかった。ついに契友である蔚堂〔林平造〕のもとに帰すことになった。すなわち、なお私の外府〔財産を所管する役所のこと〕にある。これまでの歳月のことを記して、「墨緣」を書き留めることとする。大正十二年〔1923〕、癸亥の年の二月十七日、長尾甲。

雨山は画帖を入手した奈良・五条の実業家・林蔚堂（名は平造）のため賛辞を惜しまなかった。雨山は跋文を記す2年前に一度手にとっていた。ここでいう「墨緣」には、史実を考証する学者としての雨山の冷静さと、名品を手許におくことができなかった収集家として雨山の残念さが込められているのではないだろうか。

おわりに

昭和7年(1932)、現在もつづく京博の夏期講座にて、長尾雨山は、かつて居住した上海で参加した詩会での一挿話を紹介した³⁰。

「支那では画が上手であっても、学問がなかったら士大夫の間に相手にせられないということを、私自身で目撃しておることがありますからつけ加えてお話ししておきます」。ある詩会で「偶然蘇東坡の誕生日にあたっていましたので、東坡の像を描いてそれにみなが詩を題したら、韻事を添えて好いであろう」ということになった。画人として呉昌碩がいたが、人物画を得意としないということで同地に滞在中の「日本では有名な画家」を招いて蘇軾（号は東坡居士、1037-1101）像を描いてもらうことに。しかし、「名をいうことは遠慮いたしますが、学問のほうはあまり深くない人」ゆえに、「画においてはかなり技術を持っておる人であるが、しかるにまったく職人か何か扱うように一杯の酒を饗（もてな）しもせず、すぐ返した。そのくらい交際上においても、学者と学問のない人との差別がはな

はだしく露骨であります」。

長尾雨山は、幕末から明治・大正・昭和初期に日本の文化の近代化の過程で「正」の評価からすりぬけた存在である。それは30代後半で疑獄事件に巻き込まれて官界を離れ、上海そして京都でも在野での活動に終始していたからである。岡倉天心が毀誉褒貶をとめないながらも近代日本の美術制度の確立に寄与し、新聞記者出身の内藤湖南が官学の京大で中国学を定着させたのにたいして、雨山は文雅の世界に生きた。

このとき、雨山は自らを中国文人の代表格である北宋の蘇軾になぞらえていたのではないだろうか。官界での左遷を経験した蘇軾は、詩書画においては理想の芸術家であった。

雨山の蘇軾への憧憬は、「寿蘇会」関連資料からもうかがえよう。大正・昭和年間に雨山は富岡鉄斎たちと複数回、蘇軾の誕生日を祝う雅宴である「寿蘇会」を開催したが、そのときに配布されたと思われる蘇軾の肖像が、雨山所蔵の作品から複製されている（図16）³¹。この作品は明末の人物画家・陳洪綬（1598-1652）の筆とされた伝称作品であるが、それでも蘇軾を尊ぶ雨山たちにとって貴重な図像であったにちがいない。雨山は上海での詩会をとおして、日本にも中国で正統とされる文人文化を根づかせようとした。在野にいた雨山はその「世話役」を名実ともに成し遂げたのである。

長尾雨山の漢学そして中国学の学識は、蘇軾のような起伏のある経歴とともに、在野であったからこそ生かされたといえるのではないだろうか。



図16 伝陳洪綬筆「蘇長公像」（個人蔵）

- 1 本稿は、第11回 SGRAチャイナ・フォーラム「東アジアからみた中国美術史学」(2017年11月25日、於北京師範大学)にて同題で口頭発表した内容に加筆・修正したものである。
- 2 文化財保護という制度面からの展開については、拙稿「『渡来絵画』からみた日本の国宝史」(『京都国立博物館開館120周年記念特別展覧会 国宝』展覧会図録、京都国立博物館、毎日新聞社、NHK 京都放送局、NHK ブラネット近畿、2017年)にて論じたことがある。
- 3 長尾雨山の前半生については、杉村邦彦「長尾雨山とその交流」(『墨』第116-130号(連載15回)、芸術新聞社、1995年9月-1998年1月)が詳しい。
- 4 実際のところ、雨山は無実であった。樽本照雄「長尾雨山は冤罪である」『大阪経大論集』第47巻第2号、大阪経済大学、1996年7月。
- 5 関西地域における「新渡り」の書画の状況については、曾布川寛「関西中国書画コレクションへの誘い」(曾布川監修、関西中国書画コレクション研究会編『中国書画探訪：関西の收藏家とその名品』二玄社、2011年)がわかりやすい。
- 6 東京を中心とする関東地域での中国絵画コレクションの形成については、塚本磨充氏が東京国立博物館勤務をふまえて考察した「『日本が見た中国』という誤解の系譜」(『美術手帖』第68巻第1032号、2016年1月)をはじめ、『関西中国書画コレクションの過去と未来：国際シンポジウム報告書』(関西中国書画コレクション研究会、2012年)所収の宮崎法子「日本近代における文人文化熱とその消長：財閥の美術蒐集を軸に」や富田淳「槐安居コレクションと聴水閣コレクション：高島菊次郎氏と三井高堅氏」に詳しい。
- 7 内藤湖南についての論者は数多いが、たとえば、陶徳民「大正期中国書画蒐集の指南役としての内藤湖南：その眼識と実践」(前掲『関西中国書画コレクションの過去と未来』)を参照されたい。
- 8 資料の総目録は、拙編著『長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究』(科学研究費助成事業(若手研究B)報告書)、京都国立博物館、2018年3月)に掲出した。
- 9 この資料群による研究成果には、西上実「漢学者長尾雨山の活躍」(『中国近現代文化研究』第19号、中国近現代文化研究会、2018年3月)、西上実「上野理一の手紙：有竹斎中国書画コレクションの形成と特色」(『國華』第1404号、國華社、2012年10月)、拙稿「『陳老蓮画蘇長公像』について：長尾雨山関係資料のなかから」(『山本竟山の書と学問：湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』展図録、関西大学博物館、2018年)などがある。
- 10 漢学と中国学(支那学)についての概説は数多いが、たとえば、斎藤希史『漢文脈の近代：清末＝明治の文学圏』(名古屋大学出版会、2005年)などがわかりやすいであろう。
- 11 山田利明『中国学の歩み：二十世紀のシノロジー』(大修館書店、1999年)などに詳しい。
- 12 中国歴史博物館編、勞祖德整理『鄭孝胥日記』第1冊、1891年12月12日の項、中華書局、1993年、255-256頁。
- 13 吉川幸次郎「解説」長尾雨山『中国書画話』筑摩書房、1965年、361頁。
- 14 拙稿「鄭孝胥寄雨山尺牘卷 鄭孝胥筆」(作品解説)『中国近代絵画と日本』展図録、京都国立博物館、2012年、271頁。
- 15 長尾雨山「下保津川記」(漢文)『龍南会雑誌』第59号、1897年10月、46-47頁。
- 16 南摩羽峰講評、前掲『龍南会雑誌』第59号、48頁。
- 17 長尾雨山談「漢詩の添削」『夏目漱石全集月報』第16号、岩波書店、1937年12月。
- 18 長尾横太郎「詩想」『龍南会雑誌』第61号、1897年12月、2頁。
- 19 長尾横太郎「支那古代の詩変を論ず」(連載)『龍南会雑誌』第62-69号、1897年12月-1898年12月。
- 20 岡倉天心の中国旅行は、「支那旅行日誌(明治26年)」(『岡倉天心全集』第5巻、平凡社、1980年)などでその全貌がわかる。明治45年(1912)の旅行では、北京で長尾雨山の連絡先を問い合わせた記述がある(May 12th:「長雨山 上海愛而近 Elgin路(豊陽館にて問合) 商務印書館」)。「九州・支那旅行日誌(明治45年)」、前掲『岡倉天心全集』第5巻、252頁。
- 21 松村茂樹「長尾雨山が上海で参加した詩会について」(『日本中国学会報』第66号、日本中国学会、2014年10月)などを参照。
- 22 この書帖は、長尾正和監修『缶廬詩翰』(省心書房、1982年)にて影印されている。
- 23 長尾雨山「碑帖概論」、前掲『中国書画話』、158-159頁。
- 24 この節と次の節での議論は、筆者による以下の口頭発表と一部重複することを承知されたい。Motoyuki Kure, "The Modernity of Nagao Uzan's Connoisseurship", AAS in Kyoto (2016年6月25日、於同志社大学)。
- 25 長尾雨山と博文堂のかかわりをうかがうには、西上実「油谷達と博文堂：そのコロタイプ美術出版について」(『美術フォーラム21』第26号、醍醐書房、2012年11月)が参考になろう。
- 26 拙稿「論語集註草稿残稿 朱熹筆」『関西九館中国書画録Ⅱ』関西中国書画コレクション研究会、2015年3月、123頁。
- 27 拙稿「幽篁枯木図 郭昇筆」『関西九館中国書画録Ⅲ』関西中国書画コレクション研究会、2018年3月、113頁。
- 28 翁同文「郭昇非郭祐之考」『芸林叢考』聯経出版、1977年、163-165頁。
- 29 拙稿「日本所蔵の沈周九段錦図冊」『故宮文物月刊』第371期、国立故宮博物院(台北)、2014年2月。
- 30 長尾雨山「支那南画について」、前掲『中国書画話』、59-61頁。
- 31 前掲拙稿「陳老蓮画蘇長公像」について『山本竟山の書と学問』展図録、24頁。

総合討論

進行／ 王志松（北京師範大学）

討論／ 趙京華（北京第二外国語学院文学院）

王中忱（清華大学中国文学科）

劉曉峰（清華大学歴史学科）

総括／ 董炳月（中国社会科学院文学研究所）

同時通訳（日本語⇄中国語）／ 丁莉（北京大学）、宋剛（北京外国語大学）



王志松 それでは、フォーラム後半の討論に入ります。私は司会を務めます北京師範大学の王志松です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のフォーラムのテーマは「東アジアからみた中国美術史学」です。私たちは美術史を専門としておりません。それにもかかわらず本日のフォーラムの討論に参加したのはなぜか。それはテーマが「美術史」ではなく、あくまでも「美術史学」であるからです。つまり、内容はもちろん「美術史」と関係がありますが、もっと「学」・「学科」の形成に重きが置かれているのではないかと思います。

学科制度としての近代美術史の成立は、それのみで完結する現象ではありません。それは、周辺領域と密接な関係を持つ中国の近代化という大きな現象にふくまれるものです。「美術史」は他の学問、学科の形成と深く関わってくる総合的な文化現象です。基調講演のお二人のお話は非常に幅広く、美術そのものに対する専論だけでなく、美術の背後にひ



そむ歴史・社会・美学という問題にも言及しました。中国美術史学を近代的学科編成の問題として見るならば、本日お越し下さった三人の討論者の先生方は十分に討論に参加する資格があるでしょう。なぜなら、それぞれの立場からそれぞれの専門分野の学科形成に関して研究したことがあるし、また中国美術に関して格別のご興味を抱いていらっしゃるからです。

それでは趙先生よりお言葉を賜りたいと思います。趙先生は魯迅研究の専門家で、ご論著は日本と深い関わりを持っています。昨年、董炳月先生と共に『魯迅蔵浮世絵』の解説に加わりました。

近代民族国家と広域文化史のジレンマ

趙京華

去年、私は北九州市立大学で開催されたフォーラムで塚本先生の発表を興味深く拝聴しました。その時の内容は、本日林先生が問題提起で言及した「中間地帯」を連想させるものであり、もし一國史の歴史叙述から抜け出して、あらためて各地に所蔵されている美術品を観察すれば新しい知見が見込める、ということでした。つまり、新しい視点で既存の美術品の新しい価値を見出すという考え方を学びました。



本日の塚本先生の講演を拝聴した感想を述べたいと思います。先生は近世における中国美術品の所蔵の変遷を解きほぐしながら、新しい視座を提示してくれました。これまでの美術史上の名作あるいは名作鑑賞についてではなく、美術品の所蔵・流通から透けて見える武家の盛衰と、盛衰にともなう権力構造の変化です。この視点から掘りさげること、美術品の背後にある文化史が明らかになったのではないのでしょうか。

そして呉先生の講演では、長尾雨山という明治・大正・昭和時代に日中を股にかけて活躍した学者を紹介してくださいました。雨山の魅力は、客観的に美術品を鑑定できる、という独自の考え、官と民、日本と中国の間で立場が揺れ動くところにあります。この学者の歴史的意義について学ぶ事ができました。あらためて御礼申し上げます。

ここでは二つの質問を提示して議論の呼び水にしようと思います。

まず、基調講演をなさったお二人は戦前の「支那学」をなぜ中国学と呼称したのでしょうか？近代日本の中国と関わる知的活動を研究すれば、戦前の日本では支那学といい、中国学とはいいません。中国学は戦後の概念です。美術史という制度設計は、国家の政治・戦略が原動力であることを念頭におくと、近代日本における中国絵画史の制度設計は、歴史そのものに還元する必要があるのではないのでしょうか。

そして、一國史観を超越した東アジア美術史学の構築のためには、近代民族国



家史の枠組を相対化しなくてはなりません。なぜなら、私たちが所属する学術制度は民族国家設立時の制度の延長線上にあり、この知の体系の根底には植民地主義という文脈が潜んでいます。民族国家史の枠組を超えた新しい東アジア美術史の構築には、新しい制度の基準、新しい評価の基準が要請されます。お二人の講演を拝聴して、制度の重大な改革は、歴史に対する反省が必要だと感じました。

■ 呉孟晋

趙先生ありがとうございました。今回の発表で私はあえて「支那学」を使いませんでした。先生が指摘なさったように、政治的配慮です。長尾雨山も中国学という呼称を用いておりませんので、正確を期するなら「支那学」と呼称するべきではあります。

■ 塚本麿充

私たちが中国学を学びはじめた時もこの問題にぶつかりました。植民地主義は無視できない要因ですが、どうやってこの認識を乗り越えるかが、私たちの世代の責任だと思います。

近代中国美術教育と日本

■ 王志松 次に王中忱先生にお言葉をいただきます。王先生は中日比較文学専門で、昨年「＜美術革命＞と＜文学革命＞の交差」という論文を発表なさいました。

■ 王中忱 さきほどは非常に充実した講演を拝聴し、大変勉強になりました。塚本先生は江戸時代の中国美術品の流通、特に将軍と大名の間の流通に焦点を絞っておられます。この流通の過程から、私たちは美術品の持つ政治・歴史・社会的背景についてうかがい知ることができます。これは、私たちが普段、美術館や博物館で展示を見るだけでは知り得ない重要な情報です。塚本先生の美術史・社会史・文化史・政治史を縫い合わせたといえる横断的な研究方針自体に美術史研究の新動向があると思います。

翻ってそれは、美術史をはじめ文化史・文学史の研究領域における閉鎖的な現状に対する問いを私たちに投げかけてくれます。もし専門分野のみに集中すれば、頭打ちになることは必至でしょう。

呉先生の講演についてですが、実は私も長尾雨山に関心を持っており、長尾が在籍した商務印書館について研究していました。先ほど呉先生がスクリーンにて披露された長尾雨山旧蔵『論語集注』残稿は、2012年に東京の台東区立書道博物館で開催された「宋時代の書」展で見たことがあります。京都国立博物館から貸し出されたものでした。

長尾雨山の『中国書画話』は、内藤湖南の『中国古代絵画』とならぶ日本中国絵画研究の古典です。内藤の著作は既に中国語訳が出ていますが、長尾のものはまだ訳本がありません。長尾の大量の未発表原稿のうち正式に出版したものはこの一冊のみです。当時、資料を見ることができないため長尾雨山研究は中国人にとって難しいと考えられておりましたが、今後全集の出版に大いに期待しています。

長尾雨山は1903年から1914年まで中国に滞在していました。この10年によって彼の中国に対する理解、古代中国・書画書法への理解はほぼ固まったと言って良いでしょう。そしてこの間に上海で中国の学者と交流を深めたのが重要な点で、深く掘りさげるべきでしょう。たとえば鄭孝胥の日記、張元済の日記と書簡には長尾について言及されています。また、長尾は『東方雑誌』に漢詩文を寄稿しています。もし将来、長尾雨山全集が編まれるのであれば、これらの資料も加えるべきではないでしょうか。多国間、少なくとも日中両国の研究者の合作によって完成するものだと思います。

また、1914年の時点では中国における近代美術史教育はまだ本格的には始まっておりません。1912年に劉海粟が上海美術專科学学校（南京芸術学院の前身）を設立したものの、まだ組織化の途上にありました。本格的な美術教育は1918年に蔡元培が北京で設立した国立北京美術学校（中央美術学院の前身）から始まりますが、それは北京大学学制改革前後のことです。このようにして、長尾の書画観は、



まさしく彼が清末の、伝統文化の素養を持った学者との交流を通じて培われたのです。長尾の帰国後まもなくして中国近代美術が勃興します。中国近代美術は日本との密接な関係がありました。興味深いことに、当時の中国において美術を志すものは日本で西洋絵画を学び、同時に中国美術史の再構築を試みます。したがって陳師曾や高剣父たちが記述した絵画史はこのような背景の中での所産でした。

私たちがこの時代の歴史を見る、あるいは研究することは、非常に興味深いことです。お二人は書画の流通についても講演してくださいました。古典書画は基本的に原物が流通しますが、塚本先生が強調されたように、江戸時代では模造品が重要な役割を担いました。

近代では印刷の機械化による流通が発達し、1930年代まで、中国が西洋絵画に接する重要な媒体は原画ではなく印刷された図版でした。洋画家の倪貽徳がかつてこのように指摘しています。当時の上海美術专科学校の教師や生徒が日本に留学した理由は、日本で印刷された西洋絵画の図版の質が優れていたからだそうです。ヨーロッパに直接留学する人もいましたが、少数派です。皆さんもご存知のように、魯迅がしばしば不満に思っていたことは、日本の書物で見た書画を中国の雑誌に掲載すると、画がつぶれてよく見えないことでした。

1920～1930年代の中国の視覚芸術を研究するにあたって重要なことは、流通の媒体の変化ということです。この変化は印刷の機械化と密接に結びついています。印刷された図版が、どのようにして中国人の視覚感覚に影響を与えたのか。これは、今後の私たちが議論すべき問題でもあります。

中間領域の芸術作品：その流通と「他者からの視線」

■ 王志松 次に、劉曉峰先生にお言葉をいただきます。劉先生は、美術鑑賞だけではなく、時々水墨画も揮毫なさっています。

■ 劉曉峰 呉先生の講演は、非常に手堅い実証研究であり、貴重な資料を多く紹介してくれました。長尾雨山の再評価は、近代日中文化交流史の新しい可能性を示すものです。

まず、塚本先生のご講演について感想を述べたく思います。

八大山人の作品が所蔵されている京都の泉屋博古館の青銅器館に行った時のことです。博古館の母胎である住友財団はかつて銅銭を扱っていた経緯で、銅製品関係のコレクションを所有しており、中国の青銅器が多数所蔵されています。古代の青銅器の非常に重要な機能のひとつが礼器です。青銅器にはよく文字が刻まれています。たとえば何尊（訳注：西周成王時代（紀元前11世紀）の銅尊）は、周公旦とともに洛陽を建設した何氏の祖先の事績が内部に刻まれており家宝として代々伝えられましたが、周王朝滅亡後、秦漢期において漢の皇帝が自らの子息である王あるいは諸侯への礼物としてこれら青銅器を贈りました。



従来、私たちが古代の青銅器について研究するとき、歴代の諸侯の間でどのように流通していたのかを検討することをあまり重視してきませんでした。基本的に青銅器自体の特徴についての考察が一般的ですが、芸術史の領域にも流通の学問が必要です。特に塚本先生が指摘なさった、国境を越える芸術品の流通学というべきものが重要です。

もうひとつ、林少陽さんが問題提起で指摘した中間地帯論について感想を述べたいと思います。中間地帯論は、一国一民族といった枠組を超えるものです。ただ、同一の美術品であっても、異なる民族、国家、そして享受層の変化によって鑑賞の仕方、そして評価に変化が生じます。

唐代文学を例に挙げると、日本には『遊仙窟』という唐の伝奇小説が伝わっていますが、中国では散逸していました。これを後の清朝の学者が日本で見つけ、持ち帰ったという経緯があります。中国において長らく散逸したままだった理由は、作者の張文成が中国で無名に近い人物だったためです。しかし古代中国の資料を紐解いてみると、なぜか日本と新羅において張文成が大流行したと記録されています。黄金で張文成の著作を買ったとも伝わっています。一人の文学者が中国では全く評価されず、海外では高く評価されたのです。

張文成のケースと同様に、本日塚本先生が講演で言及された牧谿は、中国美術史上ほぼ無名です。しかし、江戸幕府の将軍は八方手をつくして瀟湘八景を揃えようとし、揃うことが不可能とわかると画家に模造品を作らせました。牧谿はこれほどまでに日本で評価されていたのですね。それから福建の茶器についても、中国ではあまり評価されていませんでしたが、日本では茶道の流行とあいまって珍重されました。このような「他者の視線」は、「中間地帯」と結びつけて考えるべきなのです。この点で大変勉強になりました。

私も二点質問いたします。まず、塚本先生の研究は、日本美術史と日本史2つの専門分野を横断していますが、日本史からは先生の研究をどのように評価しているのか、そして日本史研究者はどのような態度なのでしょう。

また、呉先生への質問は、「寒食帖」が火災から保護されたのは長尾雨山と関連があるそうですが、その逸話についてご教示をお願いいたします。

塚本麿充 多分野交流、つまりディスコースですが、困難がつきまとうものです。なぜなら、美術史研究はいまだに作品研究が主流なのです。そして、私自身も、学生指導の際には基礎となる作品研究を中心に行っています。ですが、私達はいつまでも作品の表現史を語るだけではいけません。表現技法はとても重要で美術史研究の根幹ですが、人と物の関係をも考慮すべきです。この点から切り込むことで、私達は作品と対面したときの感動がどうやって生まれたのかを理解することが可能となります。このような考えを起点として私は研究を始めました。このような多分野交流に関して、いかにその溝を乗り越えるべきかが私達の世代がチャレンジすべき課題です。

呉孟晋 長尾雨山と「寒食帖」の逸話について、火災とは関東大震災のことで、この時のコレクターは菊池惺堂と言います。彼は、「寒食帖」と「瀟湘臥遊図巻」を

所蔵していました。大震災の時、菊池はすぐさまこの二つの絵画を運び出しました。菊池惺堂と長尾雨山は直接のやりとりは頻繁ではありませんでしたが、内藤湖南と雨山は親しくつきあっていました。おそらく惺堂は湖南を介して雨山に題跋を依頼したのでしょう。長尾雨山は惺堂が主催する雅会などにも参加したことでしょう。

総括

董炳月

まず、本フォーラムのテーマ「東アジアからみた中国美術史学」に戻しましょう。このテーマが提起する問題は、まず一つ目に「美術史か美術史学か」にあります。これまでの議論を拝聴するに、この点は掘りさげられておりません。史学の問題なのか、あるいは美術史の問題なのか、それとも両方なのか。考える必要があります。



もう一つの問題は、なぜ「東アジアからみた」、「美術史学」なのでしょう。か。「東アジアからみ」という文脈において、中国近美術史にとってどのような意味をもつのか？この問題は美術史以外の諸領域とも関わります。この問題こそは、私達のフォーラムの生産的な意義のひとつです。

この問題は2014年の第8回チャイナ・フォーラム「近代中国と近代日本美術史」とも密接な関係があります。そこで、佐藤道信先生は「東アジア美術は成立するのか」という問いを投げかけてきました。この佐藤先生の問いは、塚本先生、呉先生の問題提起とも共通する部分があります。つまり、中国美術史という概念は既に東アジアという文脈の中で解体され、厳密的な「中国美術史」は存在しないのではないのでしょうか。

私は魯迅研究、特に日中比較を専門にしていますが、偉大な文学者としての魯迅の活動は、文学ではなく美術がそのきっかけだという発見がありました。

彼は日本留学時代から頻繁に「美術」という言葉を使用していました。そして、1912年、南京から北京へ移った魯迅が教育部で科長に任じられていた時、彼は社会教育司僉事(せんじ)(現在の中国教育部副司長に相当する官職)に任命され、科長として美術教育を管轄していました。そこで、中国近代美術史の制度設計の問題と関わります。(先生のお話と重なりますが、)蔡元培が中華民国教育総長であった時は、中華民国建国当初から美術教育が大きな問題でした。そこから考察して分かったことは、魯迅の初期の美術観は日本に基づいており、彼の文筆業はまさにその美術から始まったということです。この例からもわかるように、近代日中関係において美術は交流の主要媒体として機能していたのです。

さらに思考体系の中での細部はどうなっているのか、です。そこで具体例ですが、私達が美術品を鑑賞する時、画家やコレクターの国籍の意義は何なのでしょう。か？どの視点から美術品を分析すればいいのでしょうか？題材？スタイル？それとも画家・コレクターの国籍でしょうか？

そこで、日本近代の画家である梅原龍三郎に思い至りました。梅原は油彩で故宮を題材にした連作を制作しました。彼はいまの北京飯店から見た故宮を描いています。もし画家の国籍を事前に知らされなければ、誰も画家が日本人だとは分からないでしょう。

また先月、東京国立博物館で横山大観の作品「長江之巻」というとても横に長い水墨の画卷が展示されていました。大観が「長江之巻」を制作するのに、事前に勉強したということです。画の前半には雨が描かれていますが、画を続けてみると雨が止みます。これは「東辺日出づれども西辺雨ふる」(訳注:劉禹錫「竹枝詞」其一)から着想を得たのでしょうか?そして、風雨にさらされて一對の燕が飛んでいるのが描かれています。これは「細雨魚兒出で、微風燕子斜めなり」(杜甫「水檻遣心」其一)や「落花人獨り立ち、微雨燕双(なら)びて飛ぶ」(晏幾道「臨江仙」)などの詩を連想させます。はたして大観は日本美術でしょうか中国美術でしょうか?それともアジア美術でしょうか?こう考えると、再び国家と地域の枠組から美術品を鑑賞する問題に戻ってくることになります。私達が国家と地域の視点から美術品を眺めたとき、観察という行為は何を生み出すのか?このような問題についてもこのフォーラムでひとつひとつ検討する必要があります。

※テープ起こし [原語は中国語] および日本語翻訳: 宋 晗 (フェリス女学院大学)

講師略歴

■塚本 磨充 【つかもと・まるみつ】 TSUKAMOTO Maromitsu

1976年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。大和文華館、東京国立博物館を経て、2015年より東京大学東洋文化研究所准教授。専門は宋代を中心とする中国絵画史。著書に、『北宋絵画史の成立』（中央公論美術出版、2016年）、近年の論文に、「道宣律師像・元照律師像の絵画表現とその制作集団」（『國華』1458号、2017年）、「兩個“趙令穰”——《秋塘圖》與《湖庄清夏圖》接受的中日比較研究——」（『千年丹青國際學術研討會論文集』（上海書畫出版社、2015年）、「江戸時代所見之中國繪畫——狩野畫派的摹本製作與中國畫史研究」（『典藏古美術』第248期、2013年）、など。

■呉 孟晋 【くれ・もとゆき】 KURE Motoyuki

1976年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。博士（学術）。2009年から京都国立博物館勤務。現在、学芸部主任研究員。専門は近現代をはじめとする中国絵画史。担当した主な展覧会は、『中国近代絵画と日本』展（2012年）、『国宝』展（2017年）など。最近の論文に、「展望の《仮山石》について：中国現代彫刻における「仮（偽る）」という戦略」（『海賊史観からみた世界史の再構築』思文閣出版、2017年）、「中華民国期の絵画における「風俗」へのまなざし」（『風俗絵画の文化学3』思文閣出版、2014年）、「辛亥革命と京都国立博物館の中国絵画：上野コレクションと須磨コレクションについて」（『美術フォーラム21』第26号、2012年）、など。

あとがき

第11回 SGRA チャイナ・フォーラム

「東アジアからみた中国美術史学」報告

塚本 磨 充

※本稿は、「第11回 SGRA チャイナ・フォーラム『東アジアからみた中国美術史学』」（『鹿島美術研究：年報第35号別冊』、417-427頁、2018年）から転載した。

2017年11月25日、北京師範大学において第11回 SGRA チャイナ・フォーラム「東アジアからみた中国美術史学」が開催された。共催の北京師範大学や清華東亜文化講座の告知や広報の成果もあって、当日は会場を埋め尽くすほどの総勢70名以上の聴衆が参集し、本テーマへの関心の高さがうかがえた。

2014年から行ってきた清華東亜文化講座との共催による本フォーラムは、広域的な視点から東アジア文化史再構築の可能性を探ることをテーマの主眼に据えている。

過去3回のフォーラムでは、近代に成立した国民国家のナショナリズムの言説に取り込まれ、東アジア各国において分断された一国文化史観からいまだ脱却しきれない今日の歴史認識や価値観の問題点を浮き彫りにした。さらに、「国境」や「境界」というフレームに捉われない当地域全体の文化的相互影響、相互干渉してきた多様な歴史事象の諸相を明らかにし、交流を結節とした大局的な東アジア文化（受容）史観を構築することの重要性を指摘してきた。

第4回にあたる今回のフォーラムでは、昨年に続き2回目の登壇となる本報告者（塚本）と、新たに呉孟晋氏（京都国立博物館）を講師として迎え、それぞれの講演を通して、前近代から近代にかけての日本における中国美術コレクション形成と中国美術史学確立をめぐる人的・物質的往来とその交流史を照射し、改めて東アジア美術史ないし文化史が内包する越境性や多様性とはなにか、そして越境や交流によって創出された新たな価値観をどのように受容・共有していくか、を提示することとなった。

はじめに、総合司会の孫建軍氏（北京大学）による登壇者紹介と、今西淳子 SGRA 代表による開会挨拶とフォーラムの開催経緯の説明があった。次いで、前半部の問題提起と2つの講演、休憩をはさんだ後半部の討論（質疑応答）と総括の二部構成で展開した。

まず林少陽氏（東京大学）の問題提起では、過去のチャイナ・フォーラムで提示された、従来の一国美術史観への批判と「国家」に収斂され得ない中間領域に存在する美術作品の再編に関する諸問題を踏まえて、近現代中国美術史学が社会の変革期に直面した文化的アイデンティティーの葛藤を「中間地帯」というキーワードから読み解いた。ここでは、清末から民国期にかけて活躍した高剣父や陳

樹人ら嶺南画派による日本画を介した西洋画法受容と失われた伝統的中国画法への回帰を例に挙げ、さらに傅抱石や潘天寿ら同時代画家による言説をとりあげながら、前近代と近代／東洋と西洋のはざまで新たな「中国絵画（国画）」確立を模索する中国美術家たちのジレンマを紹介した。

続いて本報告者による講演「江戸時代の中国絵画コレクション—近代・中国学への架け橋—」では、室町期の足利将軍家による唐物収集と「東山御物」コレクション形成によって新たな社会的機能を付与された中国絵画が、応仁の乱による散逸を経て、再び江戸時代において文化的権威として巧みに利用されてきた実相を明らかにした。とりわけ福井藩における記念碑的な中国美術コレクションである、牧谿「平沙落雁図」（「瀟湘八景図」のうち。現・出光美術館蔵）と「初花茶入」（南宋、現・徳川記念財団蔵）をとりあげ、そこに具体例にあらわれた江戸と地方、藩と幕府、各大名家の間での唐物の交換・流通の実態、さらには狩野派による広範な模写制作ネットワークの様相を解明し、作品本体を幾重にも覆う入れ子細工のような「価値」となっていったことを指摘した。しかしながら、近代中国学と近代美術史学の成立の過程において、このような前近代の「箱」の歴史と価値体系が黙殺されてしまった結果、今日のような美的な価値体系から「作品」を評価する制度へと変化していったことを主張した。

続いて呉孟晋氏の講演「漢学と中国学のはざまで一長尾雨山と近代日本の中国書画コレクション—」では、中国学者で書家でもあった長尾雨山（1864-1942）を取り上げ、それぞれ漢学者、中国学者、在野の書画鑑定家という3つの側面からその足跡をたどった。近世と近代、日本と中国、東京と京都、漢学と中国学、官と民、そのような多様な「はざま」に身を置いた長尾雨山の特殊な社会的な性格が浮き彫りにされた。当時の中国文人や清朝遺臣との交流により培われたその書画観は、下野してからの書画鑑定にも生かされたという。また近く京都国立博物館に寄贈予定の長尾雨山の膨大な関係資料を調査・分析することにより、従来の近代美術史学の間隙を突く、近代日本の学知および中国との文化交流の新たな一端が拓かれることが提示された。近現代の日本と中国の交流史研究においては、膨大に残された資料群が近年次々と整理・公開され、新たな研究を牽引してきたが、呉氏の示された資料の多くも今まで未公開の貴重なものが多く、その点においても聴衆の関心を引くものであった。

休憩を挟んでの後半部では、王志松氏（北京師範大学）による進行のもと、過去のチャイナ・フォーラムの報告者とコメンテーターである、趙京華氏（北京第二外国语学院文学院）、王中忱氏（清華大学中国文学科）、劉曉峰氏（清華大学歴史学科）、董炳月氏（中国社会科学院文学研究所）を討論者として迎え、前半の登壇者を交えて活発な議論が交わされた。

趙京華氏は、藝術品だけでなくそのコレクション形成に付随する物語性や政治性を認識する重要性を確認したうえで、今後一国美術史を超越した東アジア美術史を構築するあたり、近代以降の植民地主義に象徴される過去のネガティブな歴史認識や政治的言説をどのように超克していくべきか、そのためにはどのような

制度改革が必要なのか、という近代の歴史叙述が直面するジレンマを踏まえ、鋭い質問を投げかけた。

王中忱氏は、中国の近代美術教育の萌芽期と清末文人との交流によって培われた長尾雨山の書画観の同時代性に着目した。さらに1920～1930年代の中国画家が日本に留学し複製された西洋絵画を通してその技法を学んだことから、近代書画の流通・伝来において模写・模本・複製が果たす役割を改めて検証し、それが中国人の視覚にどのような影響を与えたかも今後検討すべきであると提言した。

劉曉峰氏は、中間領域における「他者の目」の存在を指摘し、同一のものに対して多種多様な「異なる」見方、価値体系が並立していることを指摘し、それもまた中間領域における多層性や多様性を担っていることを強調した。

続いてフロアとの質疑応答が行われ、最後に、董炳月氏による総括があった。今回の二つの講演をうけて、近年の一連のチャイナ・フォーラムの理念の根幹である「東アジアからの視点」は中国美術史学にとってどのような意義を持つのか、改めて問い直すものであった。他方、国や地域で線引きをして「境界」をつくるならば、それに依拠する観察眼もまた異なってくるのか、今後の新たな試みの可能性を提示し、フォーラムを締めくくった。

このフォーラムでは、従来提唱された近代中国学や近代美術史学の学問体系から取りこぼされてしまった、絵画観や美術史家に焦点をあてて再評価することの意義が改めて認識された。今回取り上げられた主な題材は、前近代と近代における日本における中国美術と中国美術史学の言説だが、翻ってそれは、「他者」を受け入れた日本の歴史叙述の姿勢を合わせ鏡のように省察することに他ならない。その意味において、このような日本と中国の異なる背景を持った研究者が意見を交わすことのできる機会は、非常に重要なものとなったと言える。

また研究者の文化的背景という点に触れておくと、今回のフォーラムの日本側からの発表者は主に日本に拠点を置く中国研究者であり、コメンテーターは主に中国に拠点を置く日本研究者であった。この国籍と研究対象のクロッシングこそは、非常に豊饒な討論の成果をもたらした原因となったと言えるだろう。人文学研究においては、客観的な研究成果ということはありません、常に自らの生活や文化環境、社会的な制度のなかでなにかしらの制約を受けている。このことに自覚的にならないと、人文学研究はややもすれば独りよがりなモノローグになってしまいがちだからである。

近代的な国別のディスコースが強く制度として存在している東アジアの地域研究は、例えば、日本の中国学者は圧倒的に多数を占める日本人の他分野の研究者、もしくはこれもまた多数を占める中国人の中国研究者に対してアピールする研究に傾注しがちで、逆もまたしかりである。その意味において両者は、実はそれぞれの研究対象国、そして自らの生活基盤を置いている国、どちらにおいても数的なマイノリティーという二重の周縁に置かれる存在である。それゆえに、この両者が対話する場所は従来までは非常に希少で、それぞれが抱える学的、制度的な苦悩について討議する場や機会はほとんどなかったと言ってよい。

さらに言えば、自らの国籍と研究対象が違う場所にあるという事実は、東アジ

ア地域にとっては複雑な政治的な制約を、自らの生活環境の場に呼び起こす原因にもなりえる。しかしながら、このような自らの立脚地の危うさの上に建っているからこそ、東アジアにおける他者研究は、非常に大きな魅力を持っているとも言えるであろう。今回の限られた時間においては、その初歩的な交流をなし得ただけで、さらに深い学術交流については今後の課題となっているが、もしもこれから日本に留学する多くの中国人留学生が存在しうるとしたならば、その方たちはかつてのような日本でも中国研究をするのではなく、日本研究を行うことを主流としていくかもしれない。日本の中国学研究の最大の読者は、もしかしたら中国の中国研究者ではなく、中国の日本研究者なのかもしれないし、中国の日本研究者の最も熱心な読者は、日本の中国研究者となるかもしれない。そのような将来的なクロッシングする眼差しについても大きな展望を得ることができた、大変に有意義なフォーラムとなり、今後も有意義な交流を続けていきたいと願っている。

アンケート集計結果

開催日：2017年11月25日（土）

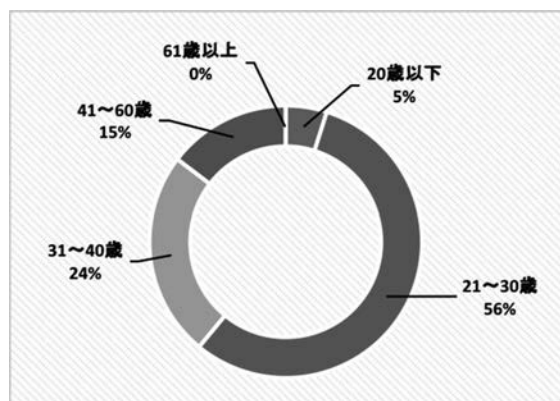
場所：北京師範大学

参加者数：90名程度

アンケート総数：41

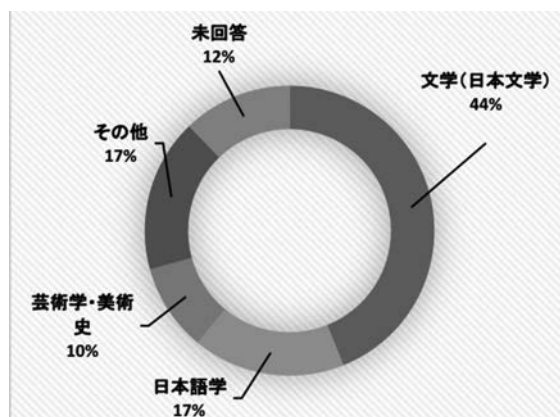
●年齢層

20歳以下	2
21～30歳	23
31～40歳	10
41～60歳	6
61歳以上	0



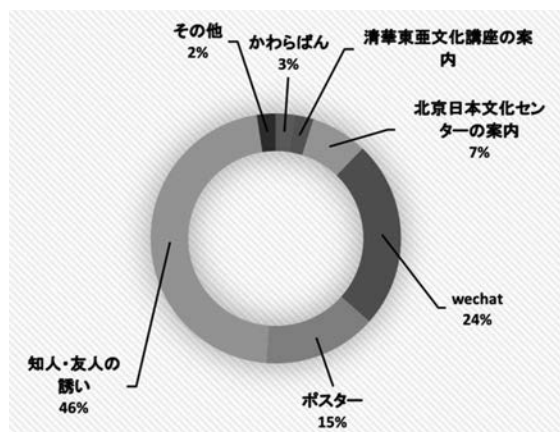
●研究分野

文学（日本文学）	18
日本語学	7
芸術学・美術史	4
その他	7
未回答	5



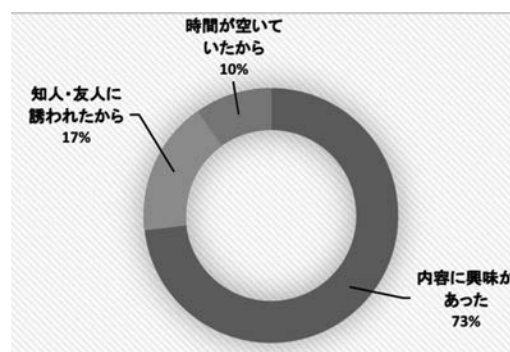
●フォーラムを知ったきっかけ

かわらばん	1
清華東亜文化講座の案内	1
北京日本文化センターの案内	3
wechat	10
ポスター	6
知人・友人の誘い	19
その他	1



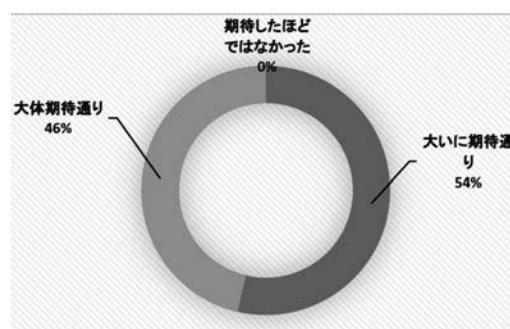
●フォーラムに参加した理由

内容に興味があった	30
知人・友人に誘われたから	7
時間が空いていたから	4
その他	0



●フォーラムの満足度

大いに期待通り	22
大体期待通り	19
期待したほどではなかった	0



自由回答欄

●このフォーラムは期待通りでしたか（理由）

- ・会場はやや狭く暑かったが、内容は素晴らしく感じた
- ・思った以上にすばらしい
- ・色々勉強になった、美術史学と文化のつながりを感じた
- ・発表がたいへん良かった、アジアをめぐる問題提起が非常に深かった
- ・視野が開けた
- ・難しい専門用語の翻訳が少しわからなかったが、内容は大変よかった
- ・内容が見事、同時通訳もとても良かった、新しい学術的視角が理解できた
- ・素晴らしい、同時通訳も非常に良かった

●フォーラムの感想

- ・今回の議論の内容が将来文字化され中国で読むことができるか
- ・新しい視角から美術史学や流通学を勉強した
- ・内容は大変勉強になった、PPTが見えにくかった
- ・価値のある良いフォーラム
- ・意味があり啓発的、収穫がたくさんあった
- ・各先生の報告に感謝、知識や示唆がたくさん得られた
- ・自分の専門分野から離れているが、密度の濃い学術的雰囲気が感じられた、勉強になった
- ・視野が広がり、研究方法を学べて勉強になった
- ・発表内容がとても良かった
- ・会場が小さく人が多すぎ、プロジェクターが時々見えない、暑かった、質が非常に高いのでまた北京でやってほしい
- ・様々な異なる領域からの角度で討論し、視野が広がった、新しい研究の問題方向を発見できた
- ・『絵本太閤記』の中の図に興味あり明清版画の影響を見つけた、日中美術交流史をもっと知りたい

- ・異なる領域の学者の発言で啓発された
- ・面白いが、時間が足りず展開ができなかったのが残念、関連する中国学者の講演を期待する
- ・民族・国家の論述フレームを超え、東アジアの広域的視点を作るのは難しいがとても重要なので（今後）期待する
- ・文物：芸術作品研究そのものだけでなくその流通や変遷、他者研究と他者の視角、審美の目線
- ・美術史研究の概況を学んだ
- ・「他者」からの漢学、中国美術史がわかった
- ・内容が深い、通訳がすごかった
- ・美術学、文学と史学、政治学に緊密に関連し学際交流研究は（互いに）啓発しあうということを実感した
- ・芸術領域、流通
- ・非常に勉強になり、美術研究に役立つ
- ・視点が新しい、内容がしっかりしている、広域文化史学の視角と思考が大変勉強になった
- ・知らなかったことを教えていただき、勉強になった
- ・日中美術の知識や研究方法を学んだ、視野が広がった、新しい方法論がわかった
- ・流通と継承
- ・討論と質疑応答は各発表のすぐ後にやったほうがもっと効果的だった

●今後希望するテーマ、コメントその他

- ・日本思想史、日本文学史
- ・日本語言語学（特に文語）
- ・中日文学関係、特に中日比較文学
- ・芸術学
- ・文人画
- ・日本美術、日本文学、日中文化交流史
- ・日中関係
- ・中日思想史、近代化問題
- ・1910～1930年代の左翼、マルクス主義、社会主義についての文学や芸術の問題
- ・日中美意識の比較
- ・中間領域と「他者の目線」について
- ・江戸時代の中日美術、絵画交流史
- ・古典籍、漢字方面
- ・西域文物と美術と日本、日本西域研究
- ・宗教文化：汎神論／多神論、領域と境界観（日本）、「敬虔」問題（？）
- ・美学
- ・文学、宗教信仰についての課題（韓国について知識不足なので、韓国関連学者と交流したい）
- ・日本社会について：過疎化、自殺率、犯罪、知識奉、刑法
- ・中日児童文学の交流と影響
- ・他者、遊仙窟
- ・デザイン史（学）の中日討論、美術（書画）から意匠（図案、デザイン）へ
- ・東アジア音楽
- ・切手の美術史
- ・日本文化のなかの中国哲学

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟―請求と処理状況に対する考察―」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003.8.30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本―幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 榮濬
2003.12.4 発行
- SGRA レポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争―どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004.2.25 発行
- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005.1.24 発行
- SGRA レポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッツ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力における
ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考―自由と市民社会をキーワードに―」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか―留学生―」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行

SGRA レポート 33	第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
SGRA レポート 34	第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」 島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤヤー、ミラ・ゾンターク、 セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
SGRA レポート 35	第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」 鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
SGRA レポート 36	第25 回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」 高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
SGRA レポート 37	第1 回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」 池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
SGRA レポート 38	第6 回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」 金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
SGRA レポート 39	第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」 黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
SGRA レポート 40	第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」 多紀保彦、加納光樹、プラチャー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
SGRA レポート 41	第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」 島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤヤー 2008. 3. 15 発行
SGRA レポート 42	第2 回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年―無理解と失敗から 相互理解と信頼へ―」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
SGRA レポート 43	渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
SGRA レポート 44	第29 回フォーラム講演録 「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ 2008. 6. 25 発行
SGRA レポート 45	第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～ 日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
SGRA レポート 46	第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」 東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
SGRA レポート 47	第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」 清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
SGRA レポート 48	第3 回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く― アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
SGRA レポート 49	第33 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」 東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
SGRA レポート 50	第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」 平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
SGRA レポート 51	第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」 大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
SGRA レポート 52	第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」 宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チイ、 劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
SGRA レポート 53	第4 回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～ TABLE FOR TWO～」 近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
SGRA レポート 54	第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか： 東アジアのエリート高校教育の現状と課題」 玄田有史 シム チュン キャット 金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
SGRA レポート 55	第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・ 建築のエネルギー事情とライフスタイル～」 木村建一、高 偉俊、 Mochamad Donny Koerniawan, Max Maquito, Pham Van Quan、 葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 剣宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
SGRA レポート 56	第5 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」 第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」 高見邦雄、汪 敏、張 昌玉 第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」 高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10 発行
SGRA レポート 57	第39 回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」 井上まどか、 ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島蘭 進、陳 継東 2011. 12. 30 発行
SGRA レポート 58	投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」 平川 均 2011. 2. 15 発行
SGRA レポート 59	第10 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「1300 年前の東アジア地域交流」 朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
SGRA レポート 60	第40 回フォーラム講演録 「東アジアの少子高齢化問題と福祉」 田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム チャン キャット、F・マキト 2011. 11. 30 発行

- SGRA レポート 61 第41回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録
「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」 柳田耕一
「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」 郭 偉
2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート 64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」
朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」
赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュン・キャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭
2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」
平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬熙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート 68 第7回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」
（日本語・中国語・英語） 宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート 69 第45回SGRAフォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」
村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート 70 第46回SGRAフォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート 71 第47回SGRAフォーラム講演録「科学技術とリスク社会ー福島第一原発事故から考える科学技術
と倫理ー」 崔 勝媛、島蘭 進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート 72 第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート 73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRAフォーラム講演録「アジア経済のダイナミズムー
物流を中心に」 李 鎮奎、金 雄熙、榎原英資、安 秉民、ドマン ホーン、李 鋼哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート 74 第49回SGRAフォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート 75 第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」
神崎智子、斉藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート 76 第9回SGRAチャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中二百年ー文化史からの再検討」
劉 建輝 発行予定
- SGRA レポート 77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力ー共進化アーキテクチャ
の模索」 孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート 78 第51回SGRAフォーラム講演録「今、再び平和についてー平和のための東アジア知識人連帯を考え
るー」 南基正、木宮正史、朴榮濬、宋均宮、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行
- SGRA レポート 79 第52回SGRAフォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート 80 第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力ー新たなアジア型モデルの模索ー」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート 81 第56回SGRAフォーラム講演録「人を幸せにするロボットー人とロボットの共生社会をめざして第
2回ー」 稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート 82 第57回SGRAフォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性ー蒙
古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」 葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニ
バートル、向正樹、孫衛国、金甫桃、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート 83 第58回SGRAフォーラム講演録「アジアを結ぶ？『一带一路』の地政学」 朱建榮、李彦銘、朴榮
濬、古賀慶、朴准儀 2018.11.16 発行
- SGRA レポート 84 第11回SGRAチャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」 塚本磨充、呉孟晋
2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート 85 第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建榮、文昊鍊 発行予定
- SGRA レポート 86 第59回SGRAフォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世紀東ア
ジアの国際関係ー戦乱から安定へー」 三谷博、劉傑、趙珖、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許泰玖、
鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 発行予定
- SGRA レポート 87 第61回SGRAフォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!?」 沈雨香、吉田文、シン・ジョ
ンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行

SGRA レポート No. 0084

第11回SGRAチャイナ・フォーラム

東アジアからみた中国美術史学

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8

Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512

SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール: sgra-office@aisf.or.jp

発行日 2019年5月17日

発行責任者 今西淳子

印刷 (株) 平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。